

プラトン『パイドン』における形相原因説

早瀬 篤

一 はじめに

プラトン哲学の中核にある形而上学説を理解しようとするとき、『パイドン』において、登場人物のソクラテスが対話相手のケベスから出された反論に応答していく箇所 (95a4-107b10) の重要性は、プラトン著作集のなかでも一二を争う。しかしそこでソクラテスが提示する説に関しては、その基本的理解の水準でも、学者たちの間で同意が成立しておらず、学者たちは対立する立場をとりながら論争を続けている。現状では、プラトン哲学はその基本構造においてもよく分かっていないと言わなければならないであろう。

ところで、一般的にはここでソクラテスが提示する説は、日本語で「イデア原因論」、英語では大文字ではじまる Forms という言葉を使って the theory of Forms as causes などと呼ばれる。しかしこの呼び方とこの理論内での「イデア」に関する基礎的理解とは、⁽¹⁾ たんに『パイドン』の議論から取り出されたものではなく、その多くをアリストテレスの証言に負っているのである。アリストテレスの『形而上学』によると、プラトンは倫理的領域で普遍を探究するソクラテスの哲学を引き継ぐが、その普遍を離在させて「イデア」(αἰδέα) と呼んだとい⁽²⁾う。多くの学者たちは、このアリストテレスの証言にもとづき、いわゆる「超越的イデア」(transcendent Forms) がはじめ

て本格的に論じられるのがこの対話篇であり、またこの箇所ですのような「アイデア」を原因とする理論が提示されると考えるのである。

『パイドン』では 102b1 で εἶδος という言葉が使われており、εἶδος と ἰδέα とは、ニュアンスの違いはあるものの、交換可能な表現なので、これが「アイデア原因論」という呼び方の直接の典拠になっていると思われる。しかし εἶδος という言葉は、日常用語としての用例はさておき、哲学用語としても、プラトンが哲学的探究のさまざまな場面で使う言葉である。例えば、初期の『ヒippias (大)』では美しさの定義が探究されるが、「すべての美しいものは美しきによつて美しい」(τὰ κακά πάντα τῷ καλῷ ἐστὶ καλὰ 287c8-d1) と確認された後で、この「美しさによつて」は「あの εἶδος が付け加わるときに」(289d4) と言ひ換えられる。また中期の『パイドロス』では、「錯乱を、我々のうちに本性的にあるひとつの εἶδος と見做した上で」(266a2-3)、それを分割していくという手法が、分割の手続きの例として示される。これらの εἶδος に関しては、『パイドン』の問題となる箇所と異なり、学者たちは一般的に「アイデア」(Forms) と見做すことはない、ということが少なくとも言えるだろう。これらの εἶδος (あるいはそれと交換可能な ἰδέα) は「形相」「実相」「相」、英語なら小文字ではじまる forms と訳するのが一般的である。

したがって、これまで学者たちが『パイドン』で提示される理論を「アイデア原因論」と呼ぶときに、すでにそれが右に引用した『ヒippias (大)』や『パイドロス』の箇所に現れる εἶδος とは異なる εἶδος が問題になっていると想定していることになる。そしてこの想定は、アリストテレスの証言に依拠しているところが大きい。そしてこの想定にもとづいて『パイドン』で提示される説を解釈しようとするとき、学者たちは対立する立場に帰属して、深刻な諸問題を解決することができないでいるのだ。

このような事情から、本稿ではアリストテレスの報告をいったん保留して、プラトンのテクストに立ち戻ってこ

の箇所を考え直したいと思う。まず、従来の「イデア原因論」という呼び方を保留し、より中立的な「形相原因説」という呼び方を採用したい。⁽³⁾そして「イデア論」を読み込む解釈（イデア解釈）が共通にもつ特性を抽出して、それと異なる道を歩んで「形相原因説」をより整合的に解釈できないかを考察する。さらにその別の道から「形相原因説」のもつ意味と役割を改めて見定めようと試みる。この重要問題には今後も多く議論を積み重ねていく必要があることは疑わないけれども、私はこのような手続きをとることによって、プラトンの形而上学説を理解するために重大な貢献ができると信じているのである。

以下では次のような手順で議論を進めたい。まず、第二節において形相原因説が提示される箇所とその前後の文脈を確認し、また形相原因説をめぐってこれまで学者たちの間で議論されてきた二つの主要問題を確認する。そのひとつ目は形相の存在論的身分をめぐる問題であり、二つ目は形相原因説の有意義性をめぐる問題である。第三節と第四節はひとつ目の主要問題を議論する。まず第三節において、これまで提示されてきた解釈を確認する。従来学者たちは「イデア解釈」をとる点では一致するが、「離在解釈」と「内在解釈」という二つの陣営に分かれる。両陣営とも対抗陣営に対して深刻な諸問題を提起しており、現状では行き詰まりに陥っている。続く第四節では、この行き詰まりを打開するための私自身の新しい解釈を提示する。私は「イデア解釈」の枠組みを撤廃し、例えば美しさの形相がそれ自体でも、また或る事物のうちにも存在するという新たな枠組みを採用することで、二つの陣営から提示された深刻な諸問題がすべて解消され、整合的な解釈を与えられると論じる。第五節で私は二つ目の主要問題に取り組み、従来学者たちが形相原因説は情報皆無であると主張するときを示す根拠が誤っていることを示し、形相原因説は定義探究の出発点を構成するという意味で哲学的に有意義であることを論じる。

二 形相原因説のおかれる文脈と二つの主要問題

まずは問題となるテクストの内容とその主要問題を確認しておくことにしよう。ソクラテスによる形相原因説の説明(100b1-e4)は、⁽⁶⁾ごく簡潔であり、長さにして1ステップヌスページにも満たない。しかし形相原因説をめぐる解以上の主要問題および学者たちのこれまでの論争を正しく理解するためには、この箇所だけに焦点を絞るのでは不十分であり、前後の文脈も視野に入れておく必要がある。そこで本節では、まず最初に、形相原因説が提示される箇所を前後の文脈のなかに位置づけ、関連する部分を辿り直し、その後で、この説を解釈する上での主要問題を確認するという手続きをとることにしたい。

もともと形相原因説が提示される契機となるのは、ソクラテスの対話相手ケベスの反論である。ソクラテスは、死後に(哲学者の)魂は善き神々のもとに赴くこと⁽⁷⁾を論証しようとして、いわゆる「循環議論」(70c4-72d10)「想起説」(73c1-77a5)「親和性議論」(78b4-80c1)と(う)三つの議論を提示していた。これに対してケベスは、一方で、これらの議論によつて、魂が身体に宿る前から存在していたこと、そして魂が身体よりも頑強で永続的であることは十分に証明されたと認めるが、他方で、魂が転生を繰り返したくさんの身体を使い果たした後、ついには消滅するという可能性が残されることを指摘する(86e6-88a1)。そして彼は、魂がその本性において不死・不滅であると論証することをソクラテスに要請するのである(88a1-b8)。⁽⁴⁾

ソクラテスはしばらく考えこんだ後で、ケベスの要請に応えるためにはまず「生成と消滅についての原因を全体として徹底的に議論せねばならない」(96a10-96a1)と述べて、次のような手続きをとることを提案する。つまり彼は、最初に、①生成と消滅とあることの原因をめぐる自分の経験をケベスに話して聞かせ、その後で、②この経験談から関連する要素を取り出して彼の反論に直接応答をする、⁽⁷⁾という手続きをとることを提案するのだ(96a1-3)。⁽⁵⁾

ソクラテスは実際にこの手続きに沿って議論を進めるので、我々も①原因をめぐるソクラテスの経験談(95e8-102a3)と②ケベスへの直接的応答(102a11-107b10)との区分を利用して、この先の議論を辿っていくことにしよう。

①原因をめぐるソクラテスの経験談(95e8-102a3)

ソクラテスはここで、自分がこれまで考察した三つの原因の説明方式とそのそれぞれに対する自分の見解をケベスに話して聞かせる。彼はまず「自然科学的原因説明」について論じ(96a5-97b7)、次に「知性にもとづく原因説明」に話を移し(97b8-99c6)、そして最後に自らが編み出したという「形相原因説」を提示する(99d4-102a3)⁽⁹⁾。ソクラテスははじめの二つの説明方式を結局のところ放棄したと語るので、ここでは形相原因説だけに焦点を絞って内容を確認したい。

ソクラテスは(仮説を出発点とする考察方法についてごく簡単に解説した後で)形相原因説を二つの仮説として提示している⁽⁹⁾。これらを「形相仮説」と「原因仮説」と呼ぶことにしよう。テキストでは最初に形相仮説が次のように提示される。

(P1) 【形相仮説1】「美しさそのものはそれ自体で何らかのものであり、そして善さや大きさも、それから他のすべてのものもそれ自体で何らかのものである」(εἶναι τι καλὸν αὐτὸ καθ' αὐτὸ καὶ ἀγαθὸν καὶ μέγα καὶ τὰλλα πάντα) (100b6-7)

(これ以降、簡潔さのために、ソクラテスが使う「美しさ」「善さ」「大きさ」などの言葉を必要に応じて一般的に「Fさ」と表すことにしたい)⁽¹¹⁾ケベスがこの仮説を立てることに同意すると、ソクラテスは続いて原因仮説を提示

する。原因仮説ははじめ次のように記述される。

(P2) 【原因仮説1】「もし美しさそのものを除いて何か他のものが美しいのならば、それはあの美しさを分有する

ことを原因として美しいのであり、それ以外のまったく何も原因としなす」(ei' ti êstin állo kalòn tãhiv
 auto' tò kalòn, oûdè' òt' ên állo kalòn eivai ñ diôrti metêxei êkeinou tou kalou) (100c4-6)

しかしすぐ後でソクラテスは(P2)に補足説明を加える。つまり、原因仮説を記述するさいには、「あの美しさを分有すること」という表現ではなく、あの美しさが「現在すること」(παρουσία)あるいは「共有関係をもつこと」(κοινωνία)などの表現を使用してもかまわない、と断るのである(100d4-7)⁽¹²⁾。だから、(P2)は原因仮説の唯一の記述方式ではないのであり、事実ソクラテスは原因仮説を次のように記述し直している。

(P3) 【原因仮説2】「全ての美しいものは美しさによつて美しくなる」(τὸ καλὸν πάντα τὰ καλὰ γίνονται
 καλὰ) (100d7-8)⁽¹³⁾

ソクラテスの発言にもとづいて形相原因説を理解しようとするならば、ここで確認された(P1)の「形相仮説」と(P2)、(P3)の「原因仮説」との組み合わせが主要な手がかりとなる。

しかしこの他に、死刑直前のソクラテスの議論を回想・報告しているバイドンが、形相原因説を自分の言葉で述べ直す箇所がある。彼は、ちょうどケベスへの直接的応答に移行する場面で形相原因説を次のようにまとめている。

(P4) 「以上のことがソクラテスに同意されると、つまり【形相仮説2】もろもろの形相のそれぞれが何らかのものであること(είναι τι ἕκαστον τῶν εἰδῶν)、そして【原因仮説3】その他のものはこれらのものを分有する(ἔχειν)ことによつて、まさにこれらの呼び名をもつこと(τοῦτων τὰλλα μεταλαμβάνοντα αὐτῶν τοῦτων τῆν ἐπισημασμένων ἰσχύειν)が同意される」と、その後でソクラテスは次のように尋ねました(102a11-b3)

ここで「まさにこれらの呼び名をもつ」とは、例えば或る人が「美しさ」の形相を分有することで「美しい」と呼ばれるように、或るものが*F*さの形相を分有することで*F*と呼ばれることを意味する。このパイドンの発言は、この対話篇ではじめて「形相」という表現をテクニカルな意味で使う——そこから我々はこの原因説明を「形相原因説」と呼ぶ——という点で注目すべき箇所であるだけでなく、①原因をめぐるソクラテスの経験談と②ケベスへの直接的応答とのつながりを我々に再び思い起こさせるという意味でも重要である。

②ケベスへの直接的応答(102a11-107b10)

形相原因説の提示のあとで、ソクラテスはケベスへの直接的応答に着手する。この議論は三段階に区分できるが、本稿の議論にとつてとくに重要なのは第一段階(102b3-103a3)であり、それは、シミアス(ソクラテスのもう一人の対話相手)が「もつ」(102c3 ἐχων)あるとは「シミアスのうち、ある」(102b5 εἶναι ἐν τῷ Σιμίῳ)と言われる「大きさ」と「小ささ」を例とする議論である。ソクラテスはまず(i)「シミアスはソクラテスよりも大きい」という事態が成立するとき、その原因は「シミアスがもつ大きさ」(102c2-3 τῷ μεγέθει ὁ τρυχάνει ἐχων)あるいは「シミアスが大きさをもつ」(cf. 102c4-5 ὅτι σμικρότητα ἐχει) ⁽¹⁴⁾ もつであると確認する。そして彼は次にもともと(i)の事態が成立していたが、シミアスと比較される対象がソクラテスからパイドンに変わり、

(ii)「シミアスはパイドンよりも小さい」という事態が成立する場合を考える。このとき、一方で、大きかったシミアスのほうは「小ささ」を受け入れて、同じシミアスのままで小さくなるのだが、他方で、シミアスがもっていた「大きさ」のほうは小さくはなれず、むしろそれは(ii)において失われてしまう。ソクラテスは軍事的メタファーを使って、「小ささ」が攻撃を仕掛けるときには、「大きさ」は撤退するか滅ぼされるのだと表現する。ここで確立されることは次のように一般化できる。

(S1) 或る個物のうちにある *F* さは、その反対（これを「*G* さ」とする）を受け入れない。それは、*G* さが攻撃を仕掛けるときには、撤退あるいは消滅してしまう。

続く第二段階 (103c7-105b4) では新たに別の存在者が導入される。それは「或る *F* さを常に伴うものであり、それが何かを占拠するときに、その占拠されるものにそれ自身の形相だけでなく、その *F* さをも常にもたらすもの」として定義される (cf. 104d1-3, 105a3-5)。例えば「火」は「熱さ」を常に伴うものであり、それが占拠するものに「火」だけでなく、「熱さ」をも常にもたらす。また「3」は「奇数」を常に伴うものであり、それが占拠するものに「3」だけでなく、「奇数」をも常にもたらす。ソクラテスはこのような存在者を導入した上で、*F* さだけでなく、これらの存在者もまた *F* さの反対 (*G* さ) を決して受け入れないと論じる。このとき彼は再び軍事的メタファーを使って、「火」は、「冷たさ」が攻撃を仕掛けるときには、それを受け入れることがなく、むしろ撤退するか滅ぼされるのだと表現する。これも次のように一般化しておこう。

(S2) *F* さを常に伴い、ある事物を占拠するとその事物に *F* さを常にもたらすものは、*G* さを受け入れない。それ

は、Gさが攻撃を仕掛けるときには、撤退あるいは消滅してしまう。

そして最後の第三段階 (1055b-107a1) で魂の不死・不滅が導き出され、ケベスへの応答が完了する。ソクラテスはここで「魂」を第二段階で導入された存在者に組み入れる。つまり、「魂」は「生命」を常に伴うものであり、それが占拠するものに「魂」だけでなく、「生命」をも常にもたらすものであると提案するのである。ところで、(S2) では問題となる存在者に撤退と消滅という二つの選択肢が与えられているが、「魂」にかぎっては、「生命」の反対である「死」を受け入れないために「不死」であり、この「不死」は「不滅」という意味なので、消滅という選択肢は残されない。⁽¹⁵⁾ 魂に残された選択肢は撤退のみである。したがって魂は「死」が攻撃を仕掛けるときにも消滅せず、たんに(善き神々のもとへと)撤退するということになる。これによって、ソクラテスははじめに論証しようとしていたことが帰結すると同時に、魂が本性的に不死・不滅であると証明するように要請したケベスへの応答が完了するのである。

以上で形相原因説が提示される箇所が前後の文脈に位置づけられたので、次に解釈上の主要問題へと目を移そう。これまで辿ってきたケベスの反論に対するソクラテスの応答は全体として形相原因説の理解に関わると言えるが、本稿が照準を合わせるのは、形相原因説の理解に直接的に関わる解釈上の問題である。実のところ、形相原因説に関しては、その内実や意義の基礎的理解を得るために同意すべきことがらについても、学者たちのあいだで同意が成立していないというのが現状である。とくに次の二つの問題が中心的に議論されており、この二つを主要問題と見做すことができるだろう。

ひとつ目は、形相の存在論的身分をめぐる問題である。これまでほぼすべての学者たちが、(P1)の形相仮説は

「イデアの存在」(the existence of Forms)を仮定するものであると理解している。しかしその場合に、形相仮説で指定されるイデアと、ケベスへの直接的応答の第一段階で登場する「シミアスがもつ(あるいはシミアスのうちにある)大きさ」とがどのように関係するのかが問題になる。実際、「シミアスがもつ大きさ」もまたイデアであると考えられる学者がたくさんいる一方で、イデアの存在論的身分に関する自らの見解にもとづいてこのことを否定し、むしろそれは「内在性格」あるいは「イデアコピー」と呼ぶべき別のものだと主張する学者も同様にたくさんいる。この問題はそもそも形相仮説で何が指定されているのかに関わっており、形相仮説を正しく理解するためにどうしても解決しなければならない問題である。

二つ目は、形相原因説はどのようにして有意義な原因説明となりうるのかという問題である。原因仮説は例えば「或るものが美しい」という事態が成立するときに、その原因を「その或るものが美しさを分有する」ことだと特定する。しかし多くの学者は、このような説明はそもそもそのような事態が成立するかどうか分らないときにはまったく何の役にも立たないのだとか、あるいはそのような事態が成立するときでも、事態と原因説明との違いがほとんどないので、原因仮説はたんなる同語反復であり、情報皆無であると批判している。幾人かの学者たちによつて原因仮説の有意義性を説明するための提案がなされているものの、これまで十分な応答は提示されていないように見える。形相原因説の意味や役割を理解するためには、この問題に一定の解答を示す必要がある。

私が見るところでは、二つ目の主要問題を解決するためには、まず形相仮説で何が問題になっているのかを明らかにする必要があるので、以下では一つ目の問題から取り組んでいくことにしたい。形相原因説に関連する問題は他にもたくさんあるが、この二つの主要問題が解決されるならば、少なくとも我々はプラトンの形相原因説の基礎的理解を得ることができたとと言えるであろう。

三 二通りのイデア解釈と議論の行き詰まり

形相の存在論的身分をめぐつて、これまで学者たちは二つの陣営に分かれて論争を続けてきた。彼らの提示する解釈とその争点を理解するために、まずはどんな点で彼らが共通見解をもつのかを見定めておきたい。私の知るかぎり、この問題を論じるすべての学者が次の二つの点で一致している。「1」ひとつ目は、(P1)の形相仮説は単純に「イデアの存在」(the existence of Forms)を措定する命題であると考えることである。そして「2」二つ目は、プラトンが或る同一の事態を描写するために使う異なる記述方式を、イデアに言及する記述方式とそれによって説明される記述方式の二つに分けることである。この二つ目の点を少し詳しく説明しよう。第二節で確認した形相原因説の関連箇所において、プラトンは事態を描写するために三通りの記述方式を使っていた。つまり、(P2)の原因仮説での「或る美しいものが美しい」という記述とその原因を示す「或る美しいものがあの美しさを分有する」という記述、またケベスへの直接的応答の第一段階での「シミアスが大きい」ことの原因を示す「シミアスが大きいをもつ」(＝「大きさがシミアスのうちにある」という記述である。或る美しいものやシミアスを x で表すならば、これらは次の三通りの記述方式にまとめることができる。

- (D1) x は F である
- (D2) x は F をもつ(＝ F が x のうちにある)
- (D3) x は F さを分有する

従来の解釈は、この三通りの記述方式のうち二つを(どの二つかはこの後すぐ説明する)ほぼ同じ意味の言明とし

て同化し、イデアに言及する記述方式とそれによって説明される記述方式に分けるのである。この「1」と「2」の特徴をもつ解釈を「イデア解釈」と呼ぶことにしよう。

では、これまで学者たちはどのように対立する見解を提示しているのだろうか。まず、一方の陣営に帰属する学者たちは、何よりもイデアが離在するという事実を強調する。つまり、イデアというものは超越的存在者であり、諸事物のうちにあるようなものではないのだ(この解釈を「離在解釈」と呼ぶことにしよう)⁽¹⁶⁾。そこで、「シミアスがもつ」とか「シミアスのうちにある」と言われる「大きさ」はイデアではありえないことになる。この解釈をとる学者たちはこれを「内在性格」とか「イデアコピー」と呼んで、イデアから区別する。ところで、この内在性格は基本的に感覚知覚されるものである⁽¹⁷⁾。だから「シミアスは大きさをもつ」も「シミアスは大きい」も感覚知覚される事態をそのまま報告する形式の命題であり、両者はたんなる言い換えに過ぎないと見做される。そのようなわけで、離在解釈では上述の三通りの記述方式のうちイデアに言及する(D3)だけが原因説明になり、(D1)と(D2)とは同化されて、(D3)によって説明される記述方式になるのである。実のところ、この解釈をとる代表的な学者は、プラトンの形相原因説を次のように定式化している。

どの F という性格、どの個物 x についても、それと同名のイデア Φ が存在し、 x が Φ を分有するとき、そのときのみ、 x は F である (i.e. x は F という性格をもつ)。 (Vlastos 1981 [1969], 85-86)

「 x は F である」(あるいは x は「イデア」 Φ の名を受けて F と呼ばれる) ということは、 x が F をもつ ($\epsilon\chi\epsilon\iota$) ことを意味し、そして、 x が F であり、 F をもつという事態は、 x が Φ を分有する ($\mu\epsilon\tau\epsilon\chi\epsilon\iota$) ことによって成立する。(藤澤 2000 [1974], 116 = Fujisawa 1974, 35)

これに対して、他方の陣営に帰属する学者たちは、イデアが離在するということを絶対視せず、少なくとも或る仕方ではそれが諸事物に内在しようというのがプラトンの立場なのだと言張する（この解釈を「内在解釈」と呼ぶことにしよう）⁽¹⁸⁾。この解釈によれば、(P1)の形相仮説で存在が確認されるものがイデアであるのは当然だが、シミアスのうちにある「大きさ」もまさしくそのような特別な仕方では確認されるイデアなのである。そしてこの内在解釈をとる学者たちは、(D2)と(D3)とでは使われている動詞こそ違うものの、「もつ」と「分有する」とは結局のところ交換可能な動詞だと考えて、この二つの記述方式を同化するのだ。こうして(D2)と(D3)とはどちらも原因としてのイデアに言及する記述方式になり、それに対して(D1)はそれらによつて説明される記述方式になるのである。

さて、これまですでに両方の陣営から対抗陣営に向けて強力な反論が提示されている。ここではそのうちでとくに重要だと考えられるものを確認しておきたい。なお、ここではこれらの反論を、イデア解釈をとる学者が提示したものと記述し、また後の議論のために通し番号をつけることにする。

まずは、離在解釈側から提示された内在解釈に対する二つの反論を見よう。【問題1】第一に、プラトンが或るイデアを取りあげてそれを最も詳しく描写するのは『饗宴』210e2-5⁽¹⁹⁾であるが、この基幹的テクストにおいて、諸事物がイデアを分有する、という言い方はされるが、イデアが諸事物のうちにあることは異論の余地なく否定されている。

(P5) その美しさはまたその者に「……どこか、何か別のもののうち、(του ὄν ἐν ἑτέρῳ τινί)」、例えば生き物や大地や天空や何か他のものうちにあるものとしても、現れることはないでしょう。むしろそれは、それ自体でそれ自体とともに常に単一相的にあるもの(αὐτὸ καθ' αὐτὸ μεθ' αὐτοῦ μονοειδέος ἀεί ὄν)として現

れ、他のすべての美しいものは何か次のような仕方でその美しさを分有するもの (μετέχοντα) なのです。

(211a1-b3)

ここで美しさのアイデアが生き物のうち、にないと言われるのは、この少し前で言及される「魂のうちの美しさ」(τὸ ἐν ταῖς ψυχαῖς κάλλος 210b6-7) や「身体の中の美しさ」(τὸ ἐν τῷ σώματι 210b7) を意識した表現であり、そのような事物のうちにある美しさと美しさのアイデアとが対比されている。⁽²¹⁾ この箇所からは、或る特別な条件のもとでなら美しさのアイデアもまた身体や魂のうちにあると読み込むことは到底できない。それに対してプラトンは、美しいものが美しさのアイデアを分有するという事態は成立すると述べている。したがって、アイデアについては「分有」を使った(D3)の記述方式は可能だが、「もつ」や「のうちにある」を使った(D2)の記述方式は使用できないことが明らかである。【問題2】第二に、「シミアスのうちにある大きさ」もアイデアであるとすると、アイデアが消滅する可能性をもつことが帰結してしまうが、それは不合理である。⁽²²⁾ 第二節で(S1)としてまとめられたように、ケベスへの直接的応答の第一段階のポイントは「或る個物のうちにあるFさは、Gさが攻撃を仕掛けるときには、撤退あるいは消滅してしまう」というところにあった。だから、「シミアスのうちにある大きさ」がアイデアであるなら、ソクラテスはアイデアが消滅する可能性を考慮していることになる。さらに決定的なのは、この応答の第三段階のなかでソクラテスが「奇数」をFさの例として取りあげながら話すことである。つまり彼は、「偶数」が攻撃を仕掛けるときに奇数は撤退せずに消滅するのだと或る人が主張するなら、「そう言う人に我々は奇数が消滅しないと戦い抜くことはできないだろう」(106a2-c)と述べている。もし仮に内在解釈が正しいとすれば、ここでソクラテスはアイデアが消滅する可能性を——たんに考慮しているのではなく——容認していることになる。しかしそれは明白に不合理である。したがって「シミアスのうちにある大きさ」には消滅の可能性が認められる以上、アイデア

ではないと考えなくてはならない。

他方で、これらの反論に劣らず強力な反論が、内在解釈側から離在解釈に向けて提示されている。【問題3】第一に、形相原因説が提示されるまさにその箇所、ソクラテスはイデアが諸事物に内在するという言い方をはつきりと許容している。彼は、(P2)「原因仮説1」の定式では「イデアを」(「分有する」という表現を使うものの、すぐ後で⁽²³⁾「イデアが」(「現在する」(παρουσία)とか「共有関係をも」(κοινωνία)などと言ってもよいと断る(1004d-⁽²³⁾e))。そしてソクラテスがこのような言い方を本心から許容していることは、『国家』においてイデア論が導入される重要箇所(475d1-476d6)での彼自身の言葉によって裏付けられる。⁽²⁴⁾

(P6) 「そしてまさに正義と不正と善と悪とすべての形相 (πάντων τῶν εἶδῶν) について同じことが言える。つまり、そのそれぞれはまさにそのものとしてはひとつのものだが、もろもろの行為や身体・物体やお互いの共有関係によつて、(τῆν ∴ τῶν προάξουσιν καὶ συμάρτων καὶ ἀλλήλων κοινωνίᾳ) あらゆるところに現れて、それぞれが多くのものだと見えるのだ」(476a5-8)

ソクラテス自身がこのようにイデアは諸事物に現在するかそれらと共有関係をもつという言い方を容認しているのに、イデアがシミアスのうちにあるという言い方を拒否するのは不合理である。【問題4】第二に、議論の文脈を考慮するならば、①形相原因説が提示される箇所と②ケベスへの直接的応答とでイデアと内在性格というそれぞれ別々のものが問題になるというのは明らかにおかしい。⁽²⁵⁾ 第二節で確認されたように、ソクラテスは議論の冒頭でまず①生成と消滅とあることの原因をめぐる経験談をケベスに話し、それから必要な要素を②ケベスへの直接的応答に利用する、という手続きをとると言っていた(956b-96a3)。さらに②を導入する(P4)でバイドンが形相原因

説の内容を確認しており、このことは②のなかで形相原因説が用いられることを強く示唆する。ところが離在解釈によると、①経験談のなかではイデアによる原因説明が提示されるが、②ケベスへの応答ではそれはまったく利用されず、むしろ内在性格による原因説明が新たに導入されることになる。しかしそのような理解は、明らかにソクラテスの手続きと相容れず、文脈を完全に無視していることになるだろう。【問題5】最後に、問題3と4ほどには深刻ではないが、プラトンが「形相」(εἶδος, ἰδέα)という言葉を用いる仕方も内在解釈を支持し、離在解釈を支持しない。⁽²⁶⁾この言葉は②ケベスへの応答を導入する(P4)で、パイドンが形相原因説を言い直すときにはじめて用いられ、その後はこの議論で「或る個物のうちにあるFさ」を指示する言葉として複数回用いられる(104D9, C7, D9, e1, 105D13, cf. 105d5-e6)。離在解釈ではこのプラトンの重要なテクニカルタームが最初の一回を除いてすべて「内在性格」を指示することになるが、それは不自然である。むしろこの言葉は一貫してイデアを指示するために用いられると考えるべきであろう。

以上の五つの問題が双方の陣営から提示されているが、これまでに説得力のある解決策は提案されていない。むしろ最近では、どちらかの立場からケベスへの応答に関わる諸問題を議論しなければならない場合でも、これらの問題には深入りしないままで自分が支持する立場から議論することが多いように思われる。⁽²⁷⁾実際、私の見るところでは、イデア解釈をとるかぎり、二つの対抗する陣営から提示される反論は同じくらい深刻であり、解決策を見つけ出すことは不可能であるように見える。そこで私は、このイデア解釈の枠組みを棄却することによって、形相原因説を整合的に説明できる新たな解釈を見つけ出せないかを考えてみることにしたい。

四 新しい解釈

前節の冒頭で我々は、イデア解釈全般に共通の二つの特徴を確認した。つまりそれは、「1」(P1)の形相仮説は

端的に「 F さのイデアが存在する」と仮定するものと理解すること、そして「2」プラトンが或る事態を記述するとき用いる次の三通りの方式

(D1) x は F である

(D2) x は F さをもつ(∥ F さが x のうちにある)

(D3) x は F さを分有する

のうち二つを同化して、イデアに言及する記述とそれによって説明される記述に分けるということだった。これに対して私は次のように提案したい。まず、「1*」形相仮説をプラトンの言葉により近いまま「 F さそのものがそれ自体で存在する」と定式化すべきであること、そして「2*」(D1)と(D2)と(D3)はすべて異なる記述方式だと見做すべきことである。このように解釈すれば、前節で二つの陣営から提示された問題はすべて解消され、形相原因説が整合的に理解できるようになると思うのである。以下本節では「1*」と「2*」とをこの順序で議論し、最後にまとめとして形相原因説が提示される箇所をこの立場から簡単に概観したい。

四・一 「 F さそのものがそれ自体で存在する」

まずは、(P1)の形相仮説を「 F さそのものがそれ自体で存在する」と定式化することによってどのように問題解決の道が開かれるのかを説明しよう。重要なのは、この定式化では、イデア解釈のように形相仮説が一枚岩的に理解されるのではなく、「 F さそのもの」と「それ自体で」とが二つの要素として区別されることである(以下簡略化のために「 F さ」の後の「そのもの」を省略する)⁽²⁸⁾。このことによつて、この仮説の「それ自体で」という要

素だけが、「或る事物のうちに」と対立すると考える道が開かれる。つまり、確かに(P1)の形相仮説では「Fさがそれ自体で存在する」ことが仮定されるけれども(その理由はこのサブセクションの最後に考察する)、Fさは必ずあらゆる場合にそれ自体で存在しなければならないものでは決してなく、何かのうちにも存在するものなのである。別の言い方をすると、Fさは「それ自体で存在するFさ」と「或る事物のうちのFさ」という存在論的に異なる身分をもつ二種類の存在者のどちらをも包括する広い概念なのだ。他方で、「それ自体で」と「或る事物のうちに」は対立する仕方なので、同一のFさが同時にこれら二つの仕方で存在することはできないことになる。

分かりやすくするために、この解釈が、イデア解釈の離在解釈、内在解釈とどのように異なるのかを図を用いて説明しよう。円Aが全体の集合、円CがAの部分集合、BがCの補集合であるとする。そして円Aは内在解釈がさまざまなイデアだと見做すものを表すとしよう。このとき離在解釈は、内在解釈がイデアと見做すものをイデアと内在性格(あるいはイデアコピー)に分けるので、円Cがさまざまなイデアを表し、Bがさまざまな内在性格を表すと考えることになる。離在解釈では円Aは全体として何かを表すわけではない。これに対して私の提案では、円

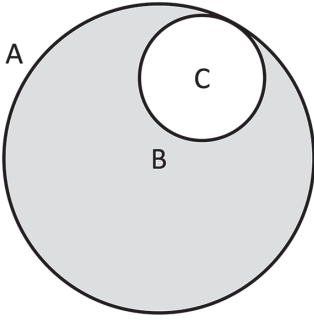


図 1

Aは全体としてさまざまなFさを表すと考える。そしてそのうちの或るものがそれ自体で存在し、別のものが或る事物のうちに存在すると考えるので、円Cがそれ自体で存在するさまざまなFさを、そしてBがそれぞれ或る事物のうちに存在するさまざまなFさを表すことになる。なお、他の諸対話篇を考慮するならば、Bはいわゆる定義探究型対話篇や総合と分割の方法を適用する対話篇⁽²⁹⁾において措定される、さまざまな事物や行為などのうちで同一のFさに相当し、また円Cが表す存在者を指すためにプラトンが使う言葉は「イデア」(εἶδος, ἰδέα)ではなくて、「真実在」(τὸ ὄντως ὄν Rep. 490b5; Phdr. 247c7; Philb. 59d4;

Ti. 52c5, etc.) である。⁽³¹⁾

このように理解することで、まずイデアが内在するかどうかをめぐる問題1と問題3が解消されることを確認したい。私の提案では、次の四つの事態が相互に区別される。

- (E1) F がそれ自体で存在する
- (E2) F が x のうちに存在する
- (E3) それ自体で存在するところの F が、 x のうちに存在する
- (E4) x のうちに存在するところの F が、それ自体で存在する

ここで(E1)と(E2)とは互いに矛盾するわけではないので、両方が成立すると考えることができるが、(E3)や(E4)はそれ自身に矛盾を含んでいるので、どちらも成立しない。このことを念頭において形相原因説の箇所を振り返ると、ソクラテスが最初に提示する(P1)の形相仮説は(E1)と同じであるが、(P2)の原因仮説を提示した後に彼が許容する「 F が x に現在する」とか「 F が x と共有関係をもつ」という言い方は(E2)に相当することが分かる。これらは互いに矛盾するわけではないので、ソクラテスがどちらの言い方をしても問題にはならない(問題3が解消される)。他方で、前節で(P5)として引用された『饗宴』211a1-b3では、恋の求道者が最終的に到達すべき美しさは、それ自体であるものとして現れて、生き物などのうちにあるものとしては現れないと言われていたが、ここで否定されるのは(E2)ではなくて、(E3)なのである。(E3)は矛盾を含む以上、その成立が否定されるのは当然だと考えられる(問題1が解消される)。

またこのことよって「形相」(εἶδος, ἰδέα)という言葉の用語法をめぐる問題5と文脈の理解をめぐる問題4も

解消できる。問題5に関しては、この議論において「形相」という用語は「それ自体で存在するFさ」とではなく、「Fさ」と交換可能な用語であると考えればよい。³²⁾確かに、形相仮説に着目して、(P1)「形相仮説1」と(P4)のバイドンの報告中の形相仮説2を較べるなら、(P4)の「形相」は(P1)の「それ自体で存在するFさ」を置き換えているように見える。しかしそうすると、②ケベスへの直接的応答のなかで繰り返し使われる「形相」はバイドンの報告中に使われる「形相」と指示対象が異なることになり、問題5は解消できない。そこで今度は原因仮説のほうに着目して、(P2)「原因仮説1」と(P3)「原因仮説2」と(P4)のバイドンの報告中の原因仮説3とを較べるなら、(P4)の「形相」はむしろ(P3)の「Fさ」を置き換える言葉として使われていると見ることができ³³⁾。この場合、ケベスへの応答のなかで「形相」が「或る個物のうちにあるFさ」を指示する言葉として繰り返し使われるとしても問題にはならないのは明らかだろう。Fさはそれ自体でも、或る事物のうちにも存在しうるものである以上、「形相」という言葉は「それ自体であるFさ」も「或る事物のうちにあるFさ」も指示できるからだ。

そして文脈をめぐる問題4に関してもほぼ同じように説明できる。形相原因説では、冒頭の(P1)でこそ「それ自体で存在するFさ」が原因として提示されるが、(P2)「原因仮説1」の後で「或る事物のうちにあるFさ」にも原因の資格が与えられる。この「或る事物のうちにあるFさ」が②ケベスへの直接的応答の第一段階で原因として扱われると考えればよいのである。もちろんこの解釈では「それ自体で存在するFさ」は形相原因説のなかだけで原因と見做され、それ以降の議論では原因としては再登場しないことになるが、その点では「自然科学的原因説明」や「知性にもとづく原因説明」も事情は同じであり、問題にはならないだろう。

しかし当然ながら次のような反論が提起されるであろう。はたしてプラトン自身がこのような区別をするというテキスト的根拠はあるのだろうか。確かに——とこの反論は続ける——形相仮説を「Fさそのものがそれ自体で存在する」と定式化すればこれまでに提起された諸問題を解決するための道が開かれるかもしれない。しかしこのよ

うに理論上の解決案を素描するだけでは、それらの問題を解決したことはない。このような解釈を提示するためには、プラトン自身が「Fが存在する」を「Fがそれ自体で存在する」から区別していたことを示す必要があるのだ、という反論が提起されるであろう。

実のところ、プラトンが認識論的・形而上学的文脈のなかで「それ自体で」(καθ' αὐτό)という言葉を使うことはきわめて稀で、⁽³⁴⁾『パイドン』では66a2, 78d6, 83b1, 100b6の四箇所に限られる。今問題になっているのが100b6の用例であり、また83b1は66a2の用例への再言及にすぎないから、残る手がかりは66a2と78d6の用例だけになる。

しかしともかく66a2の用例を含む議論(65d4-66a10)は、プラトンがこの区別をしていた証拠と見做せるだろう。⁽³⁵⁾そこでソクラテスはまず「正義そのもの」「美しさ」「善さ」などが存在することをケベスに同意させ、『パイドン』ではこれがFさに言及する最初の箇所である)、続いてそれらは感覚知覚では把握できないことを確認し、その後でそれらを考察・思考する場合を論じる。ここで彼は、それらを考察・思考するときには精確さや純粋さの程度で違いが生じることに言及し、Fさをそれ自体で把握することを知の最終段階として描写する。

(P7) その人がそれについて考察するところの、それぞれのものそのもの(αὐτὸ ἐκάστον)を我々のうちで最大限にそして最も精確に思考する準備がある者、その者こそが、それぞれものを知ることの最も近く進むことになるだろう。「…」両目や両耳や言うなれば身体全体から最大限に距離をとって、思考を、そのものをそれ自体で純粋に使って、もろもろのあるもののそれぞれを、そのものをそれ自体で、(αὐτὸ καθ' αὐτό)純粋に狩猟することを試みる者、この者こそがこのことを最も純粋に成し遂げるのではないか。(65e2-66a7)

(P7)では明らかに「Fさを考察・思考する」ことが、「Fさをそれ自体で考察・思考する」ことから区別されてい

る。この議論では、最初にその存在が同意されるFさは「それ自体で存在する」とは言われず、またFさをそれ自体で、思考する段階にない人に関しても、Fさが考察の対象になることは認められている。ここから導かれることは、Fさは必ずしもそれ自体で、存在するわけではなく、何か他のもののうちにも存在するものであり、思考の初期段階ではまさしくそのようなものとして考察されるということであろう。そして知の最終段階において哲学者は、それ自体で存在するFさという別種のもの——従来の解釈では「イデア」と呼ばれるが、私はプラトン自身の用語を使って「真実在」と呼ぶべきだと考えるもの——に遭遇するのである。だからこの箇所は、プラトン自身が「Fさが存在する」を「Fさがそれ自体で、存在する」から区別していたことを示す重要な根拠となる。

他方で、残る78d6の用例を含む議論(78d4-e6)は、むしろプラトンがこの区別をしないことの明白な証拠だと思われるかもしれない。実際この箇所はしばしば次のように訳される。

(P8) 等しさそのもの、美しさそのもの、つまり、それぞれのものがまさにそれであるところのもの自体、すなわち、実在は、変化というものを、たとえ変化がどのようなものであろうと、受け入れるようなことがあるのだろうか。あるいは、これらのそれぞれが、まさにそれであるところのものは、単一の相をそなえ、それ自体がそれ自体だけであるのだから、つねに同じあり方をしていて同一性を保ち、いかなる時にも、いかなる点においても、いかなる仕方によっても、けっして何一つ変化を受け入れないのではないのだろうか。

(78d3-7, 朴一功訳(2007, 228), 強調は筆者)

確かにこの訳を読むかぎりでは、プラトンは、Fさというものは必ずそれ自体で存在するのであり、何かのうちに存在することはありえないと考えていたようにしか見えない。⁽³⁶⁾しかしながらここで「単一の相をそなえ、それ自体

がそれ自体だけであるのだから」と訳された *novoiδeic ov avto kaθ' avto* は、主語の指示対象の範囲を制限するための挿入句だと理解することもできる。³⁷⁾ そう理解する場合には (α)「そのものがそれ自体でなら単一相的なので」あるいは (β)「そのものがそれ自体で単一相的である場合には」のように訳すことになる。³⁸⁾ このときプラトンはわざわざ挿入句を挟んで、ここでの発言が *F* 一般には妥当しないと示していることになるので、(P8) の訳とは逆に、プラトンが問題となる区別をする箇所になるであろう。さらに、(α) や (β) のように訳すことで残された問題 2 も解消される。なぜなら、あらゆる仕方であつた変化を受け入れれないのは、それ自体で存在する *F* だけであり、何かのうちに存在する *F* さが消滅することがあるとしても、この箇所と矛盾しないからだ。いずれにせよ、この箇所をどう訳すべきかが解釈に依存する以上、複数の学者が (P8) のような仕方であつたと訳すとしても、それは私の提案に対する反例にはならない。

以上から、(P1) の形相仮説を「*F* さがそれ自体で存在する」と定式化し、この定式に含まれる「それ自体で」が「或る事物のうちに」と対比されると理解するなら、前節で我々が見た解釈上の 5 つの問題がすべて解消されること、そしてこの理解は少なくとも 65d4-66a10 の議論によって裏付けられることを示せたと思う。しかし次のことが問題として残る。つまり、もし *F* さが或る事物のうちにも、それ自体でも存在するのなら、なぜソクラテスは冒頭の (P1) 「形相仮説 1」を提示するにあたって、両方を包括する「*F* さが存在する」ことではなく、「*F* さがそれ自体で存在する」ことをケベスに同意させたのだろうか。

これに対して私は次のように提案したい。つまり、「それ自体で存在する *F* さ」は「或る事物のうちにある *F* さ」よりも原因としての説明能力が高いので、有効な原因説明を提示するというこの文脈では、前者に焦点を当てる必要があつたからだ、と。私の解釈では、形相原因説は、例えばヘレネが美しいときに、その原因として次のいずれかを指定する。すなわち、(P3) の原因仮説におけるように) たんなる (A*) 「美しさ」、あるいは (B*) 「ヘレネの

うちにある美しさ」、あるいは(C*)「それ自体で存在する美しさ」のいずれかである(A、B、Cは図1の表記に対応する)。しかしこれらの異なる「美しさ」の説明能力は同じではない。なぜなら、(C*)は、あらゆる美しいものが美しい原因であるのに対して、(B*)⁽³⁹⁾は、ヘレネが美しい原因ではあるが、例えばオイラーの公式が美しい原因ではないからだ。また(A*)は、(B*)と(C*)との間で曖昧であり、たんにどちらなのかを特定していないだけなので、その説明能力もまたどちらに連なるのか曖昧になる。このような理由で、有効な原因説明を提示するという文脈のなかでは、説明能力の高い(C*)に焦点が当てられるのである。もちろんプラトンは、この同じことを、最初に(A*)を提示して、その後でそれを(B*)と(C*)に分けて詳しく説明することによって、より分かりやすく提示できたであろう。しかしプラトンが分かりやすい説明をしていないことになるというのは、この提案にとつての否定材料にはならない。なぜなら、どのような解釈をとろうとも、プラトンの議論の整合性を可能なかぎり確保しようとするならば、プラトンが難解で圧縮した仕方では形相原因説を提示していることになるというところに変わりがないからだ。したがって私は次のように提案する。つまり、ソクラテスは、原因としての説明能力の違いを考慮しているのだから、まず最初に(C*)を原因として確保し、次に(A*)と(B*)も原因だと確認するという手順を踏んで形相原因説を提示しているのだ、と。

四・二 三つの異なる記述方式

次に、(D1)「xはFである」と(D2)「xはFさをもつ」と(D3)「xはFさを分有する」はすべて異なる記述方式であるという提案を擁護したい。ここでは最初に(D1)と(D2)を同化する離在解釈に対して、それらが異なることを論じ、その後で(D2)と(D3)を同化する内在解釈に対して、それらが異なることを論じるという手続きをとりたい。

しかし先取りにまず、私の立場を説明しておこう。私は、(D1)が感覚知覚される事態をそのまま記述する方式であり、(D2)と(D3)がどちらも、思考の対象であるFさに訴えることで、(D1)として記述される事態の原因を説明する記述方式であると考ええる。(D2)と(D3)の違いを説明するため、もう一度図1を見て欲しい。私は、円Aは全体としてFさ(あるいはFさの形相)を、円Cが「それ自体で存在するFさ」(あるいはFさの真実在)を、そしてBが「或る事物のうちに存在するFさ」を表すと説明した。このとき、私は、(D2)「xはFさをもつ」がxとBが表す事物との関係を記述する方式であり、(D3)「xはFさを分有する」がxと円Aが表す事物との関係を記述する方式である。円Cも円Aに含まれるので、(D3)はxと円Cが表す事物との関係を記述するときにも、xとBが表す事物との関係を記述するときにも使うことができる。しかしプラトンは、xと円Cが表す事物との関係だけを記述する方式は提示していない。(D1)と(D2)と(D3)はこのようにすべて異なる記述方式であるというのが私の提案であるが、このことを論じるために、まずは離在解釈の(D1)と(D2)を同化する立場を批判的に見ていくことにしよう。

さて、形相原因説の箇所とその前後の文脈を見るかぎりでは、離在解釈をとる学者がなぜ(D1)と(D2)を同化するのかは不可解であると言わねばならない。すでに見たように、この解釈をとる代表的な学者は、(D1)「xがFである」と(D2)「xがFさをもつ」を同化して、この両方が(D3)のバリエーションである(D3*)「xはイデアΦを分有する」によって説明されると考える。しかしまず、ソクラテスが提示する原因仮説はいずれも、(D2)が説明される側の記述方式であることを支持しない。(P2)「原因仮説1」では「或る美しいものが美しいなら、その原因はあの美しさを分有することだ」と言われるだけで、その条件節は「或る美しいものが美しさをもちながら」では

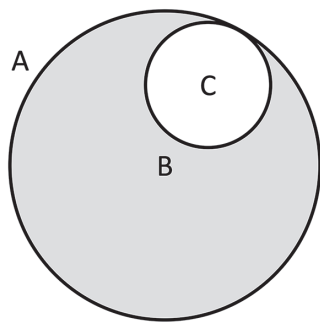


図1

ない。また(P3)「原因仮説2」では「美しいものは、美しいことによって美しい」と言われるだけで、その主語は「美しさをもつものは」ではない。だから、(D2)を説明される側の記述方式とするためのテクスト的根拠がまったくないのである。さらに問題なのは、ケベスへの直接的応答の第一段階のなかで(D2)は原因を説明する側の記述方式であることだ。つまりここでは、(D2)の「ソクラテスは小ささをもつ」は、(D1)の「ソクラテスは小さい」という事態が成立する原因を説明する記述方式であることが、理由を導く。7節によって確認されるのである(102c4-5)。このことを念頭において(P3)の「美しいものは美しい」という定式を振り返るならば、この定式もやはり(D2)の「美しいものが美しさをもつこと」が原因を説明する側の記述であることを示すように思われる。したがって、問題となる箇所を見るかぎりでは、そもそも離在解釈をとる学者が(D1)と(D2)をなぜ同化しようと思うのかを理解することも難しいと思われる。

実のところ、離在解釈をとる学者はしばしば想起説の議論(73c1-77a5)を参照させることで、この同化を擁護している。⁽⁴⁰⁾例えば、離在解釈の形成に大きな影響力をもったCornfordは、この議論において(i)「等しさそのもの」と(ii)「諸事物における感覚知覚される等しさ」とが区別されていると考える。そして、(ii)は或る人には等しく、別の人には等しく見えるといふ点で不完全なのだが、その不完全さは(i)との比較で判明する、ということが想起説のポイントなのだ、と説明する。⁽⁴¹⁾さらに彼は、想起説でなされたこの区別がずっと後の形相原因説の箇所に持ち越されると見做すのである。確かにもしこのCornfordの説明が正しいならば、(ii)に相当する「シミアスにおける大きさ」は感覚知覚されるものであり、或る点で大きく、別の点では小さくなく見えるという点で不完全であることになる。そしてソクラテスはこのようなものに原因としての資格を認めないはずである。なぜなら彼は、或るものが大きいという事態が成立するときに、その原因となるものが小さいのは不合理だと主張するからだ(101a8-b1)。

しかし想起説の議論に(ii)「諸事物における感覚知覚される等しさ」を読み込むこともやはり無理だと思われる。第一に、ここでもやはりそうするためのテクスト的根拠が存在しない。そもそもこの議論で、想起の契機となる感覚知覚されるものは次のような仕方で導入される。「等しい石や材木はときに、同じものでありながら、或る人には等しく、⁽⁴²⁾別の人には等しくなく見えるのではないか?」(Μίθοι... ἴσοι καὶ ἕβλα ἐνίῳτιε ταῦτα ὄντα τῷ μέν ἴσα φαίνεταί, τῷ δ' οὐ; 74b7-9)。そしてこれらの「等しい石や材木」は直後「等しいもの」(ταῦτα... τὰ ἴσα 74c4)と言ひ換えられるが、この「等しいもの」が、想起が起こる過程で「等しさ」(αὐτὰ τὰ ἴσα, ἡ ἰσότης 74c1)と比較されるのである。だから、想起が起こる過程の説明に「諸事物における等しさ」は登場しない。また離在解釈をとる学者は、少し後の「5b6-7 τὰ ἐκ τῶν αἰσθησέων ἴσαを参照させることもあるが、⁽⁴⁴⁾この箇所もやはりテクスト的根拠にはならない。確かにこの表現だけを考えて、これを「感覚知覚からの等しさ」と訳すこともできるが、この表現が使われるのは想起が起こる過程の説明が終わったあとなので、そこで新しい比較対象が出現するというのは不合理である。だからやはり⁽⁴⁵⁾「感覚知覚からの等しいもの」と訳すべきであり、実際に私が知るすべての翻訳がそのように訳出している。そして第二に、想起説の議論で導入された「諸事物における感覚知覚される等しさ」が形相原因説に持ち越され、「シミアスのうちの大きさ」はその一例であるならば、矛盾が発生してしまう。なぜならComfordの説明によると「諸事物における等しさ」は相反する仕方で見れるが、テクストでは「シミアスのうちの大きさ」は「大きくありながらも小さくあることを敢えてせず⁽⁴⁶⁾に」(οὐ τερὸν ἄμικεν μέγαρα ὄν ὀμικρὸν εἶναι 102e5-6)と述べられ、決して相反する仕方では現れないからである。

したがって、(D1)と(D2)は明確に区別されなければならない。テクストにはこれらを同化するための根拠がなく、むしろ(P3)「原因仮説2」の「美しいものは美しさによって美しい」やケベスへの直接的応答の第一段階の議論は、(D2)が原因を説明する側の記述方式であることを示しているからだ。すでに見たように、離在解釈

は(D2)が感覚知覚される事態をそのまま報告する記述方式だと見做していたが、これは深刻な誤りだと思われる。なぜなら第一に、私が四・一節で論じたように、*F*さはそれ自体で把握される以前、すなわち他のもののように把握される場合でも、思考の対象だと見做されているからだ。また第二に、(D2)の記述方式を用いる議論は口ゴスにおける考察の一部をなすからである。⁽⁴⁷⁾ソクラテスは、感覚知覚に依拠する探究を離れて口ゴスへと避難した後、形相原因説を考案したと語っている(99d4-100a3)。そして彼は、そこから引き出された要素をケベスへの直接的応答に利用する。だから、ケベスへの応答のなかで提示される原因説明の記述方式もまた口ゴスにおける探究の一部を構成するのだ。⁽⁴⁸⁾したがって(D2)は感覚知覚される事態をそのまま記述する方式ではない。そのような記述方式は(D1)だけであり、(D2)を(D1)に同化してはならないのである。

では次に、(D2)「*x*は*F*さをもつ」(*F*さが*x*のうちにある)と(D3)「*x*は*F*さを分有する」との区別に移ろう。この二つの記述方式が区別されることは、(P5)として引用された離在解釈がアイデアの離在を論じるときの根拠、すなわち『饗宴』211a1-b3の箇所から明らかである。確かにテクニカルでない用語法としては(D2)と(D3)で使われる動詞(ἐξενν, μετ'ἐξενν)およびその類義語の間に明確な差異を見出すことは難しく、それらは言い換えでもありうる。しかし(P5)では、或る美しさがそれ自体であるものとして現れ、諸事物のうちにはないけれども、それでも諸事物はその美しさを分有すると述べられている。ここでは、この美しさに関して、(D2)は成立しないが、(D3)は成立するという仕方である。この二つの記述方式が明確に区別されている。(P5)は、(D2)と(D3)を区別するためのテクスト的根拠となる唯一の箇所だが、プラトンが自らの形而上学説を詳細に展開する非常に重要な箇所なので、これと矛盾する記述がないかぎりには、この区別は確立されると言つてよいと思われる。

これに対して、内在解釈をとる学者から『カルミデス』において(P5)のような使い分けと矛盾する例があると指摘されている。⁽⁵⁰⁾つまり、「この対話篇の主題となる「節度とは何であるか」という問いが投げかけられる場面

(158b5-159a10)で、ソクラテスは(節度を)「分有する」(μετέχειν)と(節度が)「現在する」(παρέρχεται)・「内在する」(ἐνείηαι)とを言い換え可能な表現として使っている。ここでこれらの動詞は十分に形而上学的な意味合いをもつので、テクニカルでない用語法として無視することはできない。だから「もつ」と「分有する」との使い分けは成立しない、とこの学者は批判するのである。もしこの批判が正しければ、(D2)と(D3)を区別するための根拠も、同化するための根拠も同様に存在することになってしまう。

しかしこの内在解釈側からの指摘は、(P5)を根拠として(D2)「 x は F をもつ」と(D3)「 x は F を分有する」を区別する解釈に対して有効な反論にはならない。なぜなら、(P5)と『カルミデス』の問題となる箇所は整合的に理解できるからである。そのためにはたんに、(D3)の「分有する」は x と F との関係のあり方の詳細に立ち入らない記述方式であり、(D2)の「もつ」や「うちにある」よりも幅広く使えると考えればよい。簡単に言うると、(D2)を使える場合は(D3)も使えるが、その逆は成立しないと考えればよいのである。あるいは、図1を思い出すならば、(D2)は x と B が表す事物との関係を記述する方式であり、(D3)は x と(B を含む)円 A が表す事物との関係を記述する方式であると考えればよいのである。『カルミデス』で問題になるのは、カルミデスがもつ節度、すなわち「ある事物のうちにある F さ」(B が表す事物)のひとつである。これには(D2)が成立するので、(D3)もまた成立する。それに対して、(P5)で問題になるのは「それ自体で存在する F さ」であり、これは事物のうちには存在しないので(D2)を使用できないが、それでも x と F との間には何らかの関係があるので(あるいは円 C が表す事物は円 A が表す事物に含まれるので)、(D3)が用いられるのである。このように考えれば(P5)と『カルミデス』の問題となる箇所が整合的に理解できるだけでなく、「もつ」と「分有する」とを交換可能なものとして使うテクニカルでない用語法——これは当然ながら「それ自体で存在する F さ」には関わらない——との整合性も確保できる。なお、もしこの提案が正しければ、(D3)の記述方式が使われるからといって、

必ずしも諸事物と「それ自体で存在する *F* さ」との関係が問題になるとは限らないことに注意すべきである。⁽⁵¹⁾ しか
 してもかく、(D3) が (D2) を含意しない以上、我々は (D2) と (D3) が異なる記述方式であると考えなければならな
 いのである。

四・三 新しい解釈での形相原因説提示箇所を読み方

以上で、私が従来のアイデア解釈を棄却した上で提案する新しい解釈、つまり「1*」形相仮説はプラトンの言葉に
 近い形で「*F* さそのものがそれ自体で存在する」と定式化されるべきこと、そして「2*」(D1)「*x* は *F* である」
 と (D2)「*x* は *F* さをもつ」と (D3)「*x* は *F* さを分有する」はすべて異なる記述方式だと見做すべきことの理由を説
 明できたと思う。この節の最後に、この解釈に立つて形相原因説が提示される箇所を改めて辿り直してみたい。

ソクラテスは形相原因説を提示するにあたり、まず (P1)「形相仮説1」として「*F* さがそれ自体で存在する」こ
 とをケベスに同意させる。これは、たんに「*F* さが存在する」というよりも強い主張であり、それを含意する主張
 である。四・一節の最後に提案したように、ソクラテスが冒頭で形相仮説1を提示するのは、「それ自体で存在す
 る *F* さ」は「或る事物のうちに存在する *F* さ」よりも原因としての説明能力が高いので、まず「それ自体で存在す
 る *F* さ」に注目を集めるためだと思われる。

ソクラテスは次に、美しさを例として、(P2)「原因仮説1」「美しさを除いて或るものが美しいならば、それは
 あの美しさを分有することを原因とする」をケベスに同意させる。この箇所の「あの美しさ」(ἐκεῖνον τοῦ
 καλοῦ, 100c5-6) は (P1) で同意された「それ自体で存在する美しさ」を指示するとも、(P1) の主語が指示する
 「美しさ」を指示するとも理解できるように見える。しかし少し後の 100d5-6 でソクラテスは「あの美しさを分有
 すること」を「あの美しさの現在あるいは共有関係」(τὴ ἐκεῖνον τοῦ καλοῦ εἶνε ταγαρούα εἶνε κοινωμία) と言っ

換えてもよいと断つており、「あの美しさ」の指示対象はどちらの場合も同じでなくてはならないので、(P2)の「あの美しさ」は(P1)の主語が指示する、「美しさ」を指示すると考えなくてはならない。もしそれが「それ自体で存在する美しさ」を指示すると考えるなら、それ自体で存在する美しさが或る事物のうちに存在することになり、矛盾してしまうからである。また(P2)の「分有する」は、*F*さがそれ自体で存在する場合にも、或る事物のうちに存在する場合にも使える、関係のあり方の詳細に立ち入らない記述方式だった。だから「原因仮説1」は、「それ自体で存在する*F*さそのもの」を原因として特定する仮説ではなく、「*F*さ」を原因として特定する仮説なのである。

続いてソクラテスは、自然科学的原因説明に従う原因説明を改めて斥けた後で、(P2)の「美しさを分有する」の代わりに「美しさが現在する」とか「美しさが共有関係をもつ」という言い方をしてもよいと断る(100d3b)。そして(P3)「原因仮説2」として、そのような関係を表す言葉を剥ぎ取った「美しいものは美しさによって美しい」という(P2)の簡潔な言い換えを、最も安全な仮説として提示するのである(100d6-e3)。

この後、②ケベスへの直接的応答へ移行する過程にある(P4)で、パイドンが形相仮説と原因仮説の両方を言い直して再提示する。パイドンの「形相仮説2」は、(P1)「形相仮説1」とは異なり、「*F*さそのもの」を「*F*さの形相」(εἶδη)で置き換えて、この*F*さの形相が存在することだけを確認する。パイドンは、*F*さの形相がそれ自体で存在することを確認しないが、それはこれ以降の議論ではもはや「それ自体で存在する*F*さの形相」が原因としては再登場しないからであろう。また彼が言い直して提示する「原因仮説3」は「分有する」を使うので、(P2)と(P3)と同様に、たんに「*F*さの形相」を原因として特定する仮説である。だから、パイドンが再提示する形相仮説と原因仮説はどちらも一般的な記述方式、すなわち形相がそれ自体で存在するか、それとも或る事物のうちに存在するかに関係なく成立する記述方式になっている。

そして最後に、②ケベスへの直接的応答において形相原因説が適用されるが、ここではとくに(P3)の直前でソクラテス自身が許容した「或るものに現在する美しさ」あるいは「或るものと共有関係にある美しさ」を原因として特定する記述方式が適用される。それが「シミアスがつまみ」あるいは「シミアスのうちにある大きさ」を原因とする説明である。これらは事物のうち、に現れるが、「Fさ」あるいは「Fさの形相」であることには変わりなく、実際にソクラテスはこれを何度か「形相」(εἶδος, idea)と呼んでいる。

新しい解釈にもとづくならば、形相原因説が提示される箇所は以上のように理解できるだろう。

五 形相原因説の有意義性

第三節と第四節の議論によって、形相原因説をめぐる第一の主要問題、すなわち形相の存在論的身分をどのように理解すべきかという問題については解決を見ることができたと思われる。本節では、第二の主要問題、すなわち形相原因説はどのようにして有意義な原因説明となりうるのかという問題に取り組むことにしたい。

まずはこれに関して何が問題になっているのかを詳しく確認しておこう。檜玉に挙げられているのは原因仮説である。前節の議論を踏まえてこれを次のように定式化しておこう。

【原因仮説】もし x が F であるならば、 x は F さ (≡ F さの形相) を分有すること、それだけを原因として F である。(F さを除く任意の事物を x とする。)

原因仮説は (a) 「 x が F である」を (b) 「 x が F さを分有する」によって説明する。ソクラテス自身はこのような説明を「最も安全」(ἀσφαλέστατος 100d8) な仮説とか「無学」(ἀμαθῆ 105c1) な答えたと述べているが、多くの

学者たちは、これを個別的な事例に適用する場合を念頭において、このような仮説はむしろ「情報皆無」(uninformative)あるいは「同語反復的」(tautological)であると言つて、その有意義性を疑問視するのである。そのときに根拠として提示されるのは、次の二つの論点である。

第一に、(b)はたんに(a)の表現を少し変形させただけであり、「 x が F である」と記述されるあらゆる事態について「 x が F さを分有する」が原因であると、機械的に同じ仕方で導出できることだ。⁽⁵²⁾学者たちは、この機械的な手続きによつては、我々が或る事態の原因の理解に近づけるとは考えないのである。実際、この手続きは我々が意味をよく知らない場合にも適用できる。例えば、我々が「いじましい」という言葉の意味をはつきりと知らない場合でも、「或る人がいじましい」とき、少し言葉を変形させて、その原因は「いじましき」(あるいはアイデア解積によると「いじましきのアイデア」)を分有することだとと言えるように思われる。もちろん多少の変化は介在するので、一部の学者のように、⁽⁵³⁾原因仮説は「 x は F だから、 x は F なのだ」というのと変わらないと主張するのは間違ひであるが、⁽⁵⁴⁾(a)と(b)の表現上の差異は、そのような不満を言いたくなるほどわずかであるということは認められるであらう。

第二に、或る学者は、原因仮説はこの世界内の或る事態の正しい記述を見つけ出すことには役立たないと指摘している。⁽⁵⁵⁾原因仮説は条件文の形式になっているので、(a)「 x が F である」とすでに知っている、あるいはそう記述しているときにのみ、その原因が(b)「 x が F さを分有する」ことだと言ふことができる。しかしそもそも x が F なのか G なのか不明であるときに、原因仮説を持ちだしても、我々は x に関してまったく理解を深めることはできないように見える。例えば、「キュロスが勇敢である」とすでに記述しているときに、我々はその原因を「キュロスが勇敢さを分有すること」だと言ふことができるが、この原因説明は、それだけでは、キュロスが本当に勇敢かどうかを知るためには何の役にも立たない。したがつて、原因仮説は x に関してすでに知られている以上

の情報は何一つもたらないように見える。⁽⁵⁶⁾

形相原因説の有意義性は多くの学者たちに疑われているが、そのときに問題として提示されているのはこれら二つの論点である。そこで、私はこの二つの論点に順番に応答することにした。⁽⁵⁷⁾

ひとつ目の論点に対しては、まずプラトンは単純にすべての名詞が*F*の形相に対応すると見做すわけではないことを確認しておかねばならない。⁽⁵⁸⁾『ポリテイコス』262c10-263a1では、或る全体を諸部分に分割するときに、その部分が形相をもつ場合も、形相をもたない場合もあることが論じられる。例えば、人間全体をギリシア人と異民族に分割することは形相に即した分割ではない。なぜなら異民族というものは互いに混雑も調和もしない雑多なものを含んでおり、異民族性の形相は存在しないからだ。ここから、「ペルシア人は異民族である」は「ペルシア人は異民族性を分有する」を原因として説明できないことが分かる。形相原因説では、まず形相仮説で*F*の存在を確保した後で、原因仮説が提示されている。だからこれは、言葉の意味がよく分からないケースにも無制限に適用できるわけではなく、*F*の形相が存在すると確認できる場合のみ適用できるのである。

しかしもっと重要なことがある。つまり、形相が存在するとプラトンが認める場合にかぎっても、「*x*が*F*である」と記述されるあらゆる事態について、一様に「*x*が*F*を分有する」が原因だと見做すことは、当たり前なことではなく、むしろ哲学的に重要な決断を含むことなのである。このときに第一に思い起こすべきなのは、『メノン』71e1-73c5の議論である。そこでソクラテスの対話相手メノンは、「*x*が*F*である」と記述される事態には「*x*が*F*の形相をもつ」(cf. 72c7-8 *ἐν γὰρ τῷ εἶδος ταύτῳ δραμαί ἐχούσιν*) ことが成立するものも、成立しないものもあるという立場に立つ。つまり彼は、一方で、男であっても女であっても他の誰であっても、或る人が「健康である」とか「大きい」とか「強い」と記述される場合には、その人はそれぞれ「健康の形相」「大きさの形相」「強さの形相」という同一の形相をもつことを認める。しかし彼は、他方で、「或る人が有徳である」という場合に

は、男であるか女であるか老人であるか子供であるかなどに依じて別々の仕方では有徳になるのであり、あらゆる人が同一の徳の形相をもつとは思えないと主張するのである。同じように、『国家』第5巻における哲学者を見聞愛好家から区別する議論の冒頭部分で、見聞愛好家は美しい音や色や形、そしてそれらを要素とする美しい製作物を歓迎するが、美しさの形相を認識できずまた歓迎することもないと言われる(476d4-8)。つまり、ここで見聞愛好家は、すべての美しいものを美しくする同一の原因が存在することを認めないのである。実際、このような立場は十分に理解できるものであろう。例えば或る人は次のように言うかもしれない。つまり、我々は万年筆を美しいといい、人を美しいといい、競技上のプレーを美しいといい、数式を美しいというが、そのとき我々はたんにこれらの事態を類比的に捉えて同じ言葉で表現するだけであり、この万年筆とオイラーの公式が同じ仕方で美しいと考えるわけではないのだ、と。それに対して、プラトン(のソクラテス)は形相原因説を探究の出発点とするので、あらゆる美しいものに関して、それが美しいならば、同一の原因、すなわち美しさの形相を分有することを原因として美しいのだと想定するのである。この対立において哲学的立場に関する重要な違いが浮き彫りになる。だから、「 x が F である」と記述される事態が成立しているときに、その原因を F さの形相に求めることは、言葉を少し変形させるだけの瑣末事ではなく、哲学的立場への関与を含む重大な想定なのである。

そして二つ目の論点、すなわち「 x が F である」という記述が正しいかどうかを見出すためには役立たないという批判に対しては、次のように応答できる。つまり、プラトンは「 x が F である」かどうかを知るためには F さの定義が必要であると考えるのであり、形相原因説は定義の対象となる F さの形相を指定することによって、この定義を探究することを可能にするのである、と。かつてBenson⁽⁵⁹⁾によって説得的に論証されたように、プラトン(のソクラテス)は、次のような定義優先の原則に関与している。

(PD) もし或る人が F の定義を知らないなら、その人はどんな x についても、 x が F であると知ることはできない。(ここで x は F であると判明する可能性のあるあらゆるものを代理する。)

私自身は、ソクラテスがどんな F に関してもこの (PD) に関与するわけではなく、「大きさ」「健康」「正義」「善さ」などの、はっきりと感覚知覚される像をもたないために、定義を用いて他人に示さなければならぬような F に関与しただけ、この (PD) に関与する⁽⁶⁾と考える。しかしともかく、(PD) によれば、このようなものに関して「 x が F である」という記述が正しいかどうかを判別するためには、まず F の定義を獲得する必要があるのだ。そしてプラトンは、この F の定義が、あらゆる F であるものを F にする、原因としての F の形相を確定的に記述しなければならぬと考える。だから、形相原因説はこの F の形相を措定することによって、 F の定義探究の出発点を形成することになるのである。確かに形相原因説だけでは「キュロスが勇敢である」という記述が正しいかどうかを判定することはできない。しかし形相原因説は、あらゆる勇敢な人や行為——それが発揮される場面が戦場であれ、病気であれ、貧困であれ、快樂であれ——を勇敢にする、原因としての勇敢さの形相を措定することによって、勇敢さの定義を探究するための出発点を形成するのであり、その意味でキュロスが勇敢であるかどうかの判定に貢献するのだと言えることができるだろう。

以上で学者たちが原因仮説を同語反復的あるいは情報皆無たと批判するとき提示する根拠を論駁することができたと思う。まず、確かに (a) 「 x が F である」という事態の記述とその原因説明をする (b) 「 x が F を分有する」とでは表現上の相違はわずかであるけれども、(b) は、あらゆる F であるものを F にする原因としての、同一の F の形相の存在に関与するという意味で、哲学的に重要な決断を含む。そして確かに (b) はそれだけでは

「 x が F である」という記述が正しいかどうかを判定することはできないが、その判定のために必要になる F さの定義を探究するための出発点を構成するという意味で、世界内における事態の正しい記述を見つけ出すために貢献するのである。だから、原因仮説が情報皆無であるという批判は、まったく的外れであることになるだろう。

六 終わりに

これまでに論じられたことをもう一度簡単に振り返っておこう。本稿の目的は、過去の学者たちの議論によって表面化した、形相原因説に直接的に関わる二つの主要問題を解決することだった。そのひとつ目は、形相の存在論的身分の問題であり、これまでこの問題をめぐって、(P1)「形相仮説1」で措定されるアイデアと②ケベスへの直接的応答で言及される「シミアスのうちにある大きさ」(シミアスをもつ大きさ)とが同じだと主張する内在解釈と、それらは異なるのだと主張する離在解釈とが、お互いに深刻な問題を提起しながら、論争し続けてきた。しかし両者は共通の枠組みのなかで論争していることが確認できるのであり、その特徴は「1」(P1)がアイデアの存在を措定すると見做すこと、そして「2」プラトンが用いる三通りの記述方式、すなわち(D1)「 x は F である」と(D2)「 x は F さをもつ」と(D3)「 x は F さを分有する」のうち二つを同化して、アイデアに言及する原因説明とそれによって説明される記述方式に分けること、という二つの点にまとめられる。これに対して私はまず、「1*」(P1)をテクストの記述に近い仕方ですべて「 F さそのものがそれ自体で存在する」と定式化し、これは F さそのものが或る事物のうちに存在することを排除しないと解釈することによって、これまで提起された深刻な諸問題が解決されることを論じた。そして私は次に、「2*」(D1)と(D2)と(D3)とがいずれも異なる記述方式だと論じた。つまり、まず(D1)は感覚知覚される事態をそのまま記述するのに対して、(D2)と(D3)は思考の対象である F さに訴えて(D1)の原因を説明するのであるが、(D2)と(D3)の間にも相違があり、(D2)は x と「或る事物における F

さ」との関係を表すのに対して、(D3)は(F さがそれ自体で存在するか、或る事物のうちに存在するかに関わりなく) x と F さとの関係を表すのである。

二つ目の問題は、原因仮説にはどのような意義があるのかという問題だった。従来学者たちは、(a)「 x が F である」という事態を(b)「 x が F さを分有する」が説明するとするならば、「 F である」という表現を少し変形するだけであらゆる事態を説明できることになること、そして原因仮説は(a)が正しいかどうかの判定に貢献しないこと、これら二点を指摘しつつ、原因仮説が情報皆無であると批判してきた。これに対して私は、形相原因説はあらゆる事態に無条件で適用できるものではなく、むしろあらゆる F であるものを F にする、 F さの形相の存在に関与するかぎりで適用できること、そしてそれはまた F さの定義の探究の出発点を形成するという意味で(a)が正しいかどうかの判定に貢献することを論じた。

最後に、私の提案は、従来のイデア解釈(とくに離在解釈)にはない、もうひとつの要素——私には重大な利点だと思われる要素——をもつことを指摘して締めくくりとしたい。それはプラトンの作品内世界の整合性に関わることである。従来、学者たちはしばしば次のように想定してきた。⁽⁶⁾つまり、「イデア」(Forms)の存在を指定する(P1)を土台とするプラトンのイデア論は『バイドン』ではじめて表明されたものであり、『ラケス』や『エウテュプロン』などの初期の定義探究型対話篇では、定義対象としての「形相」(forms)に言及はされるものの、イデア論はまだ発案されておらず、その形而上学理論はまだ萌芽的状态に留まっているのだ、と。そこで彼らは文体統計学にはいずれも初期に属する定義探究型対話篇と『バイドン』との間にくさびを打ち込み、『バイドン』を中期対話篇(イデア論的対話篇)というグループに組み入れるのである。しかしそうすると、なぜプラトンは、イデア論の発案をソクラテスの若い頃の経験談のなかで提示したのが疑問として浮上するようになる。定義探究型対話篇に登場するソクラテスは壮年期から刑死直前までであり、もしプラトンが多少なりとも作品世界内の整

合性を気にかけたのであれば、ソクラテスがイデア論を発案した時期をもっと遅らせてもよかつたはずである。

もちろん、そもそもプラトンが作品内世界の整合性を気にかけていたのかは不明であり、私もこのことがそれだけで或る解釈を擁護するための根拠になるとは思わないが、これまでの議論で擁護された解釈が、さらに作品内世界の整合性を確保するというのは、その解釈がもつ重要な利点であると思われるのである。それは次のような描写である。『パイドン』の経験談で語られるように、ソクラテスはごく若い頃に自然学に熱中するが、すぐにそれを放棄して形相原因説を発案した。『パルメニデス』では、また思春期の頃と思われるソクラテスが、十分に練り上げられていないその説をパルメニデスに披露するが、多くの批判にさらされてしまう。私の解釈では、この形相原因説はそれが最初に発案された段階で、*F*がそれ自体で存在する場合も、或る事物のうちに存在する場合も視野に入れるものだった。実際、哲学者は、探究のはじめの段階では*F*を或る事物のうちに存在するかぎりで考察し、そして最終的に*F*をそれ自体で把握しようとするのである。定義探究型対話篇では、多くの事物や行為や状況において同一の「勇敢さ」や「敬虔さ」や「正義」を定義することが主題となるが、ここでは或る事物のうちに存在するかぎりでの*F*さが問題になっている。それに対して、『パイドン』や『国家』では哲学的議論に慣れ親しんだ対話相手に対して、『饗宴』や『パイドロス』では一人語りのスピーチのなかで、ソクラテスは*F*をそれ自体で把握するための哲学的探究の全過程を描写するのである。だから、私の解釈では、ソクラテスの若い頃の体験談のなかで形相原因説が提示されるとしてもまったく問題は生じない。この意味で、本稿で提示した形相原因説の解釈は、プラトンが作品内世界を構築する仕方への理解やプラトンの作品全体の読み方に関しても、これまでのものとは異なる、新しいアプローチを指し示すのである。

文献表 (2)

- Ademollo, Francesco. 2011. *The Cratylus of Plato: A Commentary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2013. "Plato's Conception of the Forms: Some Remarks." In *Universals in Ancient Philosophy*, edited by Riccardo Chiaradonna and Gabriele Galluzzo, 41-85. Pisa: Edizioni della Normale.
- Benson, Hugh H. 1990. "The Priority of Definition and the Socratic Elenchus." *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 8: 19-65.
- . 1992 [1990]. "Misunderstanding the 'What-is-F-ness?' Question." In *Essays on the Philosophy of Socrates*, edited by Hugh H. Benson, 123-136. Oxford: Oxford University Press.
- . 2000. *Socratic Wisdom*. Oxford: Oxford University Press.
- Bluck, R. S. (tr): 1955. *Plato's Phaedo*. Indianapolis and New York: The Bobbs-Merrill Company, Inc.
- Bostock, David. 1986. *Plato's Phaedo*. Oxford: Oxford University Press.
- Burge, Evan L. 1971. "The Ideas as *Atitai* in the *Phaedo*." *Phronesis* 16: 1-13.
- Burnet, John. 1911. *Plato's Phaedo*. Oxford: Clarendon Press.
- Cornford, F. M. 1939. *Plato and Parmenides*. London: Routledge and Kegan Paul Ltd.
- Crombie, I. M. 1963. *An Examination of Plato's Doctrines*, vol. 2. London: Routledge & Kegan Paul.
- Dancy, R. M. 1991. *Two Studies in the Early Academy*. Albany: State University of New York Press.
- . 2004. *Plato's Introduction of Forms*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Demos, Raphael. 1948. "Note on Plato's Theory of Ideas." *Philosophy and Phenomenological Research* 8: 456-460.
- Denyer, Nicholas. 2007. "The *Phaedo*'s Final Argument." In *Mainianis: Essays on Ancient Philosophy in Honour of Myles Burnyeat*, edited by Dominic Scott, 87-96. Oxford: Oxford University Press.
- . 2008. *Plato: Protagoras* (Cambridge Greek and Latin Classics). Cambridge: Cambridge University Press.
- Devereux, Daniel T. 1999 [1994]. "Separation and Immanence in Plato's Theory of Forms." In *Plato 1: Metaphysics and Epistemology*, edited by Gail Fine, 192-214. Oxford: Oxford University Press.

- Dixsaut, Monique. (tr.) 1991. *Platon: Phédon*. Paris: GF Flammarion.
- Ebert, Theodor. 2004. *Phaidon: Übersetzung und Kommentar*, Platon Werke 1.4. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- van Eck, Job. 1994. "Ἐκκοτεῖν ἐν Ἀνομοῖς: on *Phaedo* 99d–103c." *Ancient Philosophy* 14: 21–40.
- . 1996. "Rescuing Socrates' Δεῦτερος Πλοῦτος: a Criticism of Rowe's 'Explanation in *Phaedo* 99c6–102a8.'" *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 14: 211–26.
- Phaedo* 14: 211–26.
- Emlyn-Jones, Chris and William Preddy. (tr.) 2017. *Plato: Euthyphro, Apology, Critio, Phaedo* (Loeb Classical Library). Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Fine, Gail. 2003 [1986]. "Immanence." In *Plato on Knowledge and Forms*, 301–325. Oxford: Oxford University Press.
- Fowler, Harold North. (tr.) 1914. *Plato: Euthyphro, Apology, Critio, Phaedo, Phaedrus* (Loeb Classical Library). Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Fujisawa, Norio. 1974. "Ἐπεὶ, Μετέπει, and Idioms of 'Paradigmatism' in Plato's Theory of Forms." *Phronesis* 19: 30–58. (邦訳 : 2000 [1974]. 『プラトンのイデオロギ論ごおむる「あつ」 「分ちる」 おもる「原範型—似像」の用語ごごごごその世界解釈ごおける思惟の骨格』 『藤澤令夫著作集Ⅱ』 107–161. 東京 : 岩波書店)
- Gallop, David. 1975. *Plato: Phaedo*. Oxford: Clarendon Press.
- Hackforth, R. 1972. *Plato's Phaedo*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Loriaux, Robert. 1969–1975. *Le Phédon de Platon*. 2 vols. Bibliothèque de la Faculté de Philosophie et Lettres de Namur 45. Namur: Secrétariat des Publications, Facultés Universitaires.
- Kanayama, Yohji. 2000. "The Methodology of the Second Voyage and the Proof of the Soul's Indestructibility in Plato's *Phaedo*." *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 18: 41–100.
- Keyt, David. 1963. "The Fallacies in *Phaedo* 102a–107b." *Phronesis* 8: 167–172.
- Kühner, Raphael, and Bernhard Gerth. 1898. *Ausführliche Grammatik der Griechischen Sprache*, Zweiter Teil: Satzlehre, Erster Band. Hannover: Verlag Hahnische Buchhandlung.

- O'Brien, David. 1967. "The Last Argument in Plato's *Phaedo* I." *Classical Quarterly* 17: 198-231.
- . 1968. "The Last Argument in Plato's *Phaedo* II." *Classical Quarterly* 18: 95-106.
- Rowe, C. J. 1993. *Plato: Phaedo* (Cambridge Greek and Latin Classics). Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1993. "Explanation in *Phaedo* 99c6-102a8." *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 11: 49-69.
- . 1996. "A Reply to van Eck." *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 14: 227-240.
- . (tr.) 2010. *Plato: The Last Days of Socrates*. London: Penguin Books.
- Scott, Dominic. 1995. *Recollection and Experience*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sedley, David. 2018. "The *Phaedo*'s Final Proof of Immortality." In *Plato's Phaedo: Selected Papers from the Eleventh Symposium Platonicum*, edited by Gabriele Cornelli, Thomas M. Robinson, and Francisco Bravo, 210-220. Baden-Baden: Academia Verlag.
- Sedley, David and Alex Long. (tr.) 2011. *Plato: Meno and Phaedo*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Silverman, Alan. 2002. *The Dialectic of Essence: A Study of Plato's Metaphysics*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Stough, Charlotte L. 1976. "Forms and Explanation in the *Phaedo*." *Phronesis* 21: 1-30.
- Turnbull, Robert G. 1958. "Aristotle's Debt to the 'Natural Philosophy' of the *Phaedo*." *Philosophical Quarterly* 8: 131-143.
- Vlastos, Gregory. 1995 [1954]. "The 'Third Man' Argument in the *Parmenides*." In *Studies in Greek Philosophy, Volume II: Socrates, Plato and Their Tradition*, 166-190. Princeton: Princeton University Press.
- . 1981 [1969]. "Reasons and Causes in the *Phaedo*." In *Platonic Studies*, 2nd. ed., 76-110. Princeton: Princeton University Press.
- 岩田靖夫 (訳) 1998. 『パイドン—魂の不死について』 (岩波文庫) 東京: 岩波書店.
- 納富信留 (訳) 2019. 『パイドン—魂について』 (光文社古典新訳文庫) 東京: 光文社.
- 朴 一功 (訳) 2007. 『プラトン: 饗宴／パイドン』 (西洋古典叢書) 京都: 京都大学学術出版会.
- 早瀬 篤' 2017. 「ソクラテスは諸事例にもとづいて定義を獲得すべきだと考えるか。」『哲学研究』 601: 56-109.
- . 2018. 「Eiðoc と iðea の内在・外在について」『ギリシヤ哲学ゼミナー』 15: 29-43.
- . 2019. 「発展主義と新統一主義—プラトン研究の最近の動向から」『古代哲学研究』 51: 18-40.

——2021. 「三本の指の例が示すこと」〔『国家』522e5-524d5〕『古代哲学研究』53: 1-30.

藤澤令夫、2000 [1987]. 「Aitia-Causa-Cause——因果律」とは基本的に何だったのか『藤澤令夫著作集Ⅲ』425-429. 東京: 岩波書店.

——2000 [1996]. 『『パイドン』における自然哲学への出発とイデア原因論——反プラトンの解釈の徹底追究を兼ねて——』『藤澤令夫著作集Ⅲ』351-386. 東京: 岩波書店.

——1998. 『プラトンの哲学』(岩波新書) 東京: 岩波書店.

松永雄二(訳) 1975. 『パイドン』田中美知太郎・藤澤令夫(編)『プラトン全集1』所収. 東京: 岩波書店.

注

*本論文は、二〇二一年十一月三日に開かれた京都哲学会講演会で発表した原稿を大幅に書き直したものです。講演会で特定質問者を引き受けてくださり、詳細なコメントをくださった金山弥平先生、また最終段階の原稿にコメントをくださった栗原裕次先生に感謝いたします。本研究はJSPS科研費20K00098の助成を受けたものです。

(1) Cf. 藤澤 (1998, 86): 「本書では、広く一般に使われている「イデア(論)」という言い方を統一的に用いるが、この呼称が定着した恰好になっているのはアリストテレスによるもので、プラトン自身に由来するものではない。」

(2) Cf. *Metaph.* A6, 987a29-b9; M 4, 1078b7-32; M 9, 1086a29-b13.

(3) なお、この名称の終わりを「論」ではなく「説」としているのは、それが体系的な理論として提示されず、むしろ仮説として示されるからである。また本稿では「仮設」ではなく「仮説」の字を用いるが、これは形相原因説やその他の仮説として提示される説の「説」と対応させるためである。しかしこれらの点は、そのほうが分かりやすくなると個人的に判断しただけであり、こだわるところではないことを断っておく。

(4) この段落で「死」は二通りの意味で使われているが、それは、O'Brien (1968, 96-100) が論じるように、ケベスの反論のなかで、議論の焦点となる「死」の意味に変更が加えられるからである。この対話篇では最初「死」は(α)「魂が身体から解放されること」として定義される(644c-d)。ソクラテスが論証しようとする命題(死後に魂は善き神々のもとに赴く)における「死」はこの意味で使われている。それに対しケベスは、反論を提示するにあたって、注意深く(β)の定義に従いながら話を進めるものの、最後

に「魂が不死・不滅である」と論証するように要求するところで、暗に問題となる「死」を (b)「消滅」として再定義するのである (884-6)。このケベスの暗黙の再定義は、少し後でソクラテスによって明示的に示される (916-7)。なお、この解釈に対しては Gallop (1975, 155-156) が批判を提示している。Gallop は、ケベスの反論より後でソクラテスが「魂は最後にいわゆる死において消滅する」(954d) と述べるが、これは、O'Brien の解釈に従うと、「新しく定義された死 (消滅) が一般的な意味での死において完成する」という意味になり、混乱した言い方になってしまうと指摘する。しかし「い、わゆる、死において」という言い方はこでもう一度「死」を (a) の意味で使うことを合図していると考えられるので、Gallop が引用する箇所はたんに「魂は最後に身体から解放されるときには消滅する」という意味になるだけで、とくに問題はないはずである。なお、議論の焦点となる「死」の定義が変更されたからといって、(a) の意味での「死」(魂が身体から解放されること) が議論から完全に排除されるわけではない (cf. Rowe 1993, 217)。

(5) 私は、プラトンがこの文脈で使用する *aitia* と *aition*、およびそれらを示す関連表現 (例えば根拠・原因を示す用法の与格形名詞あるいは分詞、そして前置詞 *dia* や接続詞 *oti*, *dioti* を使う表現) はすべて広い意味での「原因」を意味すると考える。必要に応じて *oti*-節や *dioti*-節を「…を原因とする」のように訳出する。近代以降の“cause”の言葉の用法を考慮して、プラトンがここで *cause* を問題にしているところはおかしいと論じる学者もいるが、藤澤 (2000 [1987]) は近代以降の用語法に優先権を与えてプラトンを解釈する必要はないと指摘しており、私もそれに従う。

(6) 「何を原因として (F) あるのか」(Qua ri fori) はこの箇所では言及されないが、96a2-9 で付け加えられて、それ以降生成消滅の原因と同じように扱われる (cf. 97b4-5, c7)。

(7) テクストでは「君「II ケベス」が「経験談から関連要素を」説得のために利用するだろう」(96a2-3) と書かれており、ソクラテスが利用すると書かれてはいない。しかしソクラテスがこのような言い方をするのは、彼が問答によって成立する議論は答え手ものものになると見做すからである。

(8) 自然学的原因説明は、事物の変化の原因をその構成要素や構成要素に加えられる操作に求めるもので、学者たちはしばしば機械論的原因説明と呼ぶ (cf. e.g. Vlastos 1981 [1969], 82: “mechanical causes”)。ソクラテスはこの説明が、原因が原因として機能するために必要な条件の説明にすぎず、そもそも原因説明ではないと考える。他方で知性にもとづく原因説明は目的論的原因説明である。ソクラテスはこの説明を理想とするが、自分で発見することも人から学ぶこともできなかったため、この説明を用いることを諦めた

と述べる。

(9) Gallop (1975, 178-181) と Rowe (1993) に従って、以下に「形相仮説」と「原因仮説」として挙げる命題は「二つで組をなす仮説」であると考ええる。van Eck (1994), van Eck (1996) がこの解釈に反対しているが、それには従わない。van Eck の批判に対しては Rowe (1996) が説得的に応答している。

(10) 文法的には $\epsilon\iota\upsilon\alpha\iota$ $\tau\iota$ $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\nu$ は (i) $\tau\iota$ を $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\nu$ に掛けて「何らかの美しさが存在する」と訳すことも、(ii) $\tau\iota$ を述語にして「美しさが何らかのものである」と訳すこともできる。しかし van Eck (1994, 222 n.3) が指摘するように、この表現はすぐ後で引用される (P4) の $\epsilon\iota\upsilon\alpha\iota$ $\tau\iota$ $\acute{\epsilon}\kappa\alpha\sigma\tau\omicron\nu$ $\tau\acute{o}\nu$ $\epsilon\iota\delta\acute{o}\nu$ (102b1) とパラレルなので、どちらも同じ仕方で読むのが自然だが、(P4) の表現は文法的に $\tau\iota$ を述語として読まなければならない。だから (iii) は (ii) の読み方が正しいと思われる。Ademollo (2011, 457 n.9) は、この箇所では名詞化された形容詞に冠詞がつけられていないこと、また *Phd.* 65d7, 76d7-9 では $\tau\iota$ を $\kappa\alpha\lambda\acute{o}\nu$ や $\alpha\gamma\alpha\theta\acute{o}\nu$ に掛けて読まなければならないことを指摘して (i) の読み方が正しいとしている。しかし Ademollo が引用する *Phd.* 65d7, 76d7-9 は形容詞が抽象名詞化されていることをはっきりと示すための $\alpha\upsilon\tau\acute{o}\varsigma$ が添えられていないので、 $\tau\iota$ はその代わりの役目を果たしていることを見ることもできる。だから *Ademollo* の指摘は (iii) で (i) の読み方をとるための十分な根拠にはならないだろう。

(11) これに対して「…は美しい」「…は善い」などを一般的に「…は *F* である」とする。「*F* さ」は英語の *F-ness* に相当する表現であり、形容詞の述語的用法ではなく、抽象名詞(化された形容詞)であることを明確化するための工夫である。「*F* さとは何であるか？」という問いに関して、抽象名詞の *F-ness* と形容詞の述語的用法の *F* とをこのように区別すべきであることについては Benson (1992 [1990], 134 n.2) を参照。なお *Vlastos* (1995 [1954], 183 n.39) も *F-ness* と *F* との区別をするが、*Vlastos* の場合は彼自身の解釈上の立場にもとづく区別であり、*F* は「大きいものの大きさ」や「我々のもつ等しき」を含むとしているので、私や Benson の区別とは違うことに注意して欲しい。

(12) 100d6 の、複数の系統の写本が一致して $\pi\alpha\sigma\tau\eta\epsilon\nu\omicron\mu\acute{\epsilon}\nu\eta$ と読むものの、文法的観点から破損していると考えられている箇所に関しては、私は Wyttenbach の推測 $\pi\alpha\sigma\tau\eta\alpha\gamma\omicron\sigma\epsilon\nu\omicron\mu\acute{\epsilon}\nu\eta$ とはなす。Ueberweg の修正案 $\pi\alpha\sigma\tau\eta\epsilon\nu\omicron\mu\acute{\epsilon}\nu\omicron\nu$ を読む (cf. Rowe 1993, 243: “on balance the most likely reading”). どちらの読み方でも私の議論に本質的な影響はないと思う。

(13) 100d8 の $\gamma\eta\gamma\upsilon\epsilon\tau\alpha\iota$ を読むかどうか写本の読み方が分かっているが、私は読むほうが自然だと思う。読まなくても私の議論には影響

はなす。

- (14) この箇所は、直接的には (A) の事態ではなく、それに対応する「ソクラテスがシミアスよりも小さい」という事態が成立する原因を記す箇所であるが、同時に *crit.* 節が原因記述のバリエーションとなることを示す箇所でもある。
- (15) 対話篇の途中で「死」の意味に変更が加えられたことについては注 4 を参照。学者のなかには、(i) 1055a-e10 で「魂の不死」が (ii) 106e11-107a1 で「魂の不滅」がそれぞれ論証されると解釈した上で、(ii) の議論が破綻していると見做す者もいる (cf. e.g. Keyt 1963)。私は、(ii) で「不死」は「不滅」を意味することが確認されると同時に、魂には撤退という選択肢しか残されないことが明確化されるだけであり、とくに新しい論証がなされるわけではないと考える。この問題についての他の提案は Kanayama (2000, 80-87) や Sedley (2018) を参照 (私の提案は Sedley の解釈に近い)。
- (16) 離在解釈を支持するのは例えば次の学者たちである。Cornford (1939, 74-80), Hackforth (1955, 194 n.4; 150 n.1), Bluck (1955, 117-119), Vlastos (1981 [1969], 83-86), Fujisawa (1974) = 藤澤 (2000 [1974]), Devereux (1999 [1994]), Ebert (2004, 371-420), Sedley (2018, 213)。なお、この解釈で想定される「離在」は、アリストテレスがプラトンに帰していることと見做されるもので、「諸事物 (あるものは我々の世界) のうちに存在するのではなく、それ自体で存在するもの」という意味である (cf. Devereux 1999 [1994], 204-209)。アリストテレスの報告にある離在概念をこのように理解することには問題があるが、ここではたんに解釈上の立場を表す名称として使用し、離在概念の問題には立ち入らない。
- (17) Cf. Cornford (1939, 74-80), Demos (1948), Vlastos (1981 [1969], 83-86), 藤澤 (2000 [1974], 144: 「知覚的性状 (F)」), 藤澤 (1998, 115), Devereux (1999 [1994], 200)。離在解釈をとる学者の全員が、内在性格は感覚知覚されうることを明確に主張するわけではない。しかしこの立場が主流派であることは動かないだろう。私の知るかぎり、内在性格を措定しつつ、それが感覚知覚されないという立場を議論を展開して擁護する学者は、これまで誰もいない。
- (18) 内在解釈を支持するのは例えば次の学者たちである。O'Brien (1967), O'Brien (1968), Stough (1976), Bostock (1986, 182-183), Dancy (1991, 9-23), Fine (2003 [1986]), Dancy (2004, 291-313), Ademollo (2013)。
- (19) 次節において、私自身はイデア解釈ではなく別の解釈をとり、そのことよってこれらの反論は成立しなくなると論じる。だから、私自身の立場からこれらの反論が提示されているわけではないことに注意して欲しい。

(20) 念のために記すが、『饗宴』でプラトンはこれを「本性において驚嘆すべき或る美しき」(τὸ θαυμαστόν τῆν φύσιν καλὸν 210e4-5)や「あの美しき」(211e2)や「神的な美しきもの」(αὐτὸ τὸ θεῖον καλόν)と呼ぶだけであり、「イデア」(εἶδος, ἰδέα)とどう呼ぶ方は一切しない。

(21) 内在解釈をよるAdemollo (2013, 79-80)は、(P5)では「…のうちに」が文字通りの時間・空間的な意味としてのみ使われており、「シミアスのうちにある大きな」のような場合を含まないと主張する。しかしこれは到底無理な主張であろう。

(22) 内在するべきが撤退・消滅すると言われることは早くから内在解釈の弱点だと意識されてきたが (cf. O'Brien 1967, 203)、『Devereux (1999 [1994], 194-197) がこの問題を分かりやすく説明している。

(23) これらの言葉は一般に「内在する」(ἐνείηαι)と交換可能であると考えられている。実際に *Chrm.* 158e6-159a4では「定義対象の「節度」にこころい「現在する」(τραγεῖναι)と「内在する」(ἐνείηαι)とが交換可能な表現として使われている。この他に *Grg.* 506c9-e4を参照。

(24) Fine (2003 [1986], 308 n.16)が *Rep.* 476d4-7を引用して内在解釈を擁護している。Fujisawa (1974, 44-45) = 藤澤 (2000 [1974], 131-132)が *Phd.* 100d4-7は例外的表現であるとして「プラトン自身の態度表明として受け取ることに警戒しなければならぬ」(2000 [1974], 132)と述べているが、(P6)にはまったく言及していない。Fineの議論に応答しているDevereux (1999 [1994])も (P6)には言及しない。

(25) この線での反論を提示するのはDancy (1991, 16), Dancy (2004, 309) による。

(26) Cf. e.g. O'Brien (1967, 202-203).

(27) 例えば、Ebert (2004, 371-420)や Sedley (2018) は離在解釈をとりながら、Denyer (2007) は内在解釈をとりながら、②ケベスへの応答を議論するが、これらの問題には立ち入っていない。

(28) ここで次のように反論する人がいるかもしれない。つまり、「そのもの」を削除するなんてとんでもない、なぜならプラトンは「そのもの」(αὐτό)を付加することで超越的イデアかどうかを区別しているのだから」と。しかし、すでにVlastos (1981 [1969], 84 n.26)が指摘しているように、現在の文脈において「そのもの」は超越性を表す印ではありえない。なぜなら、確かに *Phd.* 102d6-9では「大きなそのもの」(αὐτὸ τὸ μέγεθος)と「我々のうちにある大きな」(τὸ ἐν ἡμῖν μέγεθος)とが対比されているように見える

が、*Phd.* 103b4-5では「相反するものそのもの」(αυτὸ τὸ ἐναντίον)——すなわち*F*と*そのもの*と*その反対のG*と*そのもの*——には「我々のうちにあるもの」(τὸ ἐν ἡμῖν)と「自然本性においてあるもの」(τὸ ἐν τῇ φύσει)とがあると言われるからだ。また従来の解釈でイデアが問題になると考えられてきた箇所でも、例えばδίκαιον, καλόν, ἀγαθόνのように並べられた複数の形容詞の最初にだけ「そのもの」が付加されるのが通例であり (cf. e.g. *Phd.* 65d4-7, 100b5-7) どれ一つにも付加されない場合もある (cf. e.g. *Phd.* 76d8-9; *Rep.* 476a1-6)。

(29) すなわち*Chrm.*, *Euthphr.*, *Hi.Ma.*, *La.*, *Ly.*, *Men.*, *Thr.* (トルファンセット順)と*Rep.*の第1巻でも。

(30) すなわち*Cra.* (cf. 421c3-427d3), *Phdr.* (cf. 259e1-274b5), *Sph.*, *Plu.*, *Phil.*でも。

(31) プラトンの著作全体における「それ自体で存在する*F*と」(＝*F*の真実在)と「或る事物・行為・状況のうちに存在する*F*と」(＝*F*の真実在の可知的像)との区別に関しては、早瀬 (2018) および早瀬 (2019, 32-36) を参照して欲しい。

(32) 実際にこれはプラトンの基本的立場である。これに関してはとくに*Rep.* 507b1-9と早瀬 (2021, 22-23) におけるその箇所についての私のコメントを参照して欲しい。もちろん議論のなかで「形相がそれ自体で存在する」と言われた後に「その形相」という言葉が使われるとき、この「形相」が「それ自体で存在する形相」だけを指す場合もある。私はどんな文脈でも「形相」は「それ自体で存在する*F*と」を指示しないと主張しているわけではない。

(33) もちろん「分有する」という言葉に着目して、次のように反論する人がいるかもしれない。つまり、「分有する」という言葉は個物とイデアとの関係だけを表すのであり、したがって原因仮説3は原因仮説2とは交換できず、言い直される前の原因仮説1とだけ交換可能なのだ」と。この反論に対しては四・二節における「もつ」と「分有する」の違いについての議論で応答したい。

(34) *Thesaurus Linguae Graecae*を用いた私の調査では、プラトン著作集(偽作を除く)で単数中性形の καὶ, αὐτὸ が出現するのは42箇所、複数中性形や単数および複数男性形を合わせると88箇所である。そのうち認識論的・形而上学的文脈で使われていると私に思われるのは、*Smp.* 211b1; *Phd.* 66a2, 78d6, 83b1, 100b6; *Rep.* 476b9-10 (同じ)まではすべて単数・中性形、および*Rep.* 516b5 (比喩のかなので単数・男性形が使われる)の7箇所だけである。ただしこれらはすべてプラトンの形而上学を理解するための最重要箇所に含まれる。

(35) 同じことは*Phd.* 82d9-83c3でおちらいされるが、その箇所は圧縮されているので独立した十分な証拠にはならない。なお、他の

対話篇を含めるなら *Rp.* 476b9-10, 515d9-516b7 もまたプラトンが問題となる区別をする証拠となるが、本稿では対話篇内部の証拠だけに議論を限定する。『国家』の関連箇所については早瀬 (2021) で論じられている。

- (36) 問題となる部分を同じように翻訳するのは例えは次のものがある。Fowler (1914, 273-275): “Or does each absolute essence, since it is uniform and exists by itself, remain the same ... ?”; Hackforth (1955, 81-82): “Or does each of these real beings, uniform and independent, remain unchanging and constant ... ?”; 松永 (1975, 226): 「“な” それらの “おのづかのまじり (ある)” と “ごそれ自体は” ただ一なる形相のみをもちものごとく “それ自身がそれ自身にならざるべからざる以上は…”; Dixsaut (1991, 240): “Ou bien, comme ce qu’est chacun de ces êtres comporte en soi et par soi une unique forme, est-ce que cela ne reste pas toujours semblablement même que soi ... ?” 若田 (1998, 72): 「“ごそれらのまじり” の『正びされるもの』は “単一の形相であり” “それ自身だけが有るものだから…”; Ebert (2004, 40): “Oder ist nicht vielmehr jedes von diesen, was ist stets von einheitlicher Gestalt für sich und verhält es sich nicht immer auf dieselbe Weise ... ?”; 納富 (2019, 105): 「“ごやむご” “じねに真にある、実在のそれそれは” “それ自体で単一な相であり” “同じ仕方と同じものに即したあり方を…” (強調は原文)。

- (37) “ごそれらご理解” の Gallop (1911, 78): “being uniform if taken alone by itself”; Bluck (1955, 75): “being of single form when taken by itself”; Loriaux (1969, 165): “si on le considère en lui-même”; Rowe (1993, 183-184): ““being uniform in and by itself, i.e. when considered in and by itself, apart from its counterparts in the world of the senses.” “これらの解釈者たちがこのように理解する動機は” “私の動機と同じく” “F” “ごそれらのものが必ずしもそれ自体で単一相的に存在するわけではないと考えることによる。なお欧米語訳では Rowe の “being uniform in and by itself” のように文字通りに訳し、解釈の余地を残したままにするものも多い。このように訳すのは、例を Gallop (1975, 27), Rowe (2010, 117), Sedley and Long (2010, 69), Emlin-Jones and Preddy (2017, 377) による。

- (38) 前注で引用した学者たちは全員 (e) の訳に近い形で原文を理解する。私は (e) のほうが自然だと思っが “どちらをとるべきであつても私の解釈には影響しない。

- (39) “それらに” “それ自体で存在する美しさは” “例えば魂のうちの美しさが” “身体の中の美しよりも尊い (cf. *Smp.* 210b6-7) な” “ごそれら” “諸事物のうちの美しさの相互関係が成立する原因になっていると考えられる。

- (40) Cornford (1939, 74-80), Demos (1948), Fujisawa (1974, 35 n.15; 52 n.56) = 藤澤 (2000 [1974], 148 n.16; 154 n.55) を参照。Vlastos

(1981 [1969]) が (D1) と (D2) を同化する根拠もおそろしく同じだと思われる。彼は、個物 (x) と性格 (F) とイデア (Φ) とを区別するにあたり、自分は Turnbull (1958) の議論全体に恩恵を受けたが、想起説では F と Φ との比較ではなく、 x と Φ との比較が問題になるという。Turnbull の主張には反対だと述べている (p.83 n.19)。想起説で F と Φ との比較が問題になるというのは、以下に説明する Cornford の解釈と軌を一にするものである。

(41) Cornford (1939, 75) は「この他に「たんに等しいと定義される量」である Equals ($\alpha\upsilon\tau\acute{\alpha}\ \tau\acute{\alpha}\ \iota\sigma\alpha$) を区別するが、私の議論では省略す⁸²。 $\alpha\upsilon\tau\acute{\alpha}\ \tau\acute{\alpha}\ \iota\sigma\alpha$ の解釈については注 43 を参照。なお、想起説の箇所で「等しい石や材木」と「石や材木における等しさ」とが交換可能なと考える (あるいはそのように記述する) 学者は離在解釈をとる学者以外にも存在する。 Cf. e.g. Rowe (1993, 167): “[Socrates]’s question will then be ‘is there such a thing as equality by itself, which is different from the equality of one stick, or one stone, to another?’” (強調は筆者) ; Scott (1995, 58 n.5): “This [75b6-7] implies that we do grasp the equality of the particulars from the senses and it is this sensible equality that we compare with the form.”

(42) 74b8-9 $\tau\acute{\omega}\ \mu\acute{\epsilon}\nu\ \dots\ \tau\acute{\omega}\ \delta\acute{\epsilon}\ \kappa\epsilon\ (\kappa\epsilon)$ 「或る人には「等しく見えるが」、別の人には…」と読むか (b) 「或るものとは「等しく見えるが」、別のものとは…」と読むか、あるいは (c) $\tau\acute{\omega}\ \tau\epsilon\ \mu\acute{\epsilon}\nu\ \dots\ \tau\acute{\omega}\ \tau\epsilon\ \delta\acute{\epsilon}\ \tau\omega\upsilon\tau\acute{\omega}$ 別の読み方をとって「或るときには…、別のときには…」と読むか解釈が分かれるが、ここではこの問題には立ち入らない。議論が煩雑化しないように Cornford の解釈をそのまま使用する⁸³。

(43) $\eta\upsilon\ \alpha\upsilon\tau\acute{\alpha}\ \tau\acute{\alpha}\ \iota\sigma\alpha$ がなぜ複数形なのかがときおり問題として取りあげられるが、プラトンは「Fさ」に言及するときに複数形を使っているのは、 $\eta\upsilon\ \tau\omega\upsilon\tau\omega$ に問題視する必要があること思ふ。 Cf. *Grg.* 497e1-3: $\tau\acute{\omega}\ \delta\epsilon\ \alpha\gamma\alpha\theta\acute{\omega}\ \nu\acute{\omega}\tau\iota\ \delta\acute{\alpha}\gamma\alpha\theta\acute{\omega}\ \pi\alpha\sigma\tau\omicron\upsilon\tau\alpha\ \delta\acute{\alpha}\gamma\alpha\theta\acute{\omega}\ \kappa\alpha\lambda\epsilon\iota\tau\epsilon\ \delta\acute{\omega}\sigma\tau\epsilon\gamma\ \tau\acute{\omega}\ \kappa\alpha\lambda\acute{\omega}\ \sigma\iota\varsigma\ \delta\acute{\alpha}\nu\ \kappa\acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron\varsigma\ \pi\alpha\sigma\tau\eta\ \cdot\ \text{Sph.}$ 225c7-9: $\tau\acute{\omega}\ \delta\acute{\epsilon}\ \gamma\epsilon\ \acute{\epsilon}\nu\tau\epsilon\gamma\gamma\omicron\nu\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\gamma\iota\ \delta\iota\kappa\alpha\iota\acute{\omega}\nu\ \alpha\upsilon\tau\acute{\omega}\nu\ \kappa\alpha\iota\ \delta\acute{\omega}\kappa\iota\omega\nu\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\gamma\iota\ \tau\acute{\omega}\nu\ \delta\acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu\ \delta\acute{\omega}\lambda\alpha\varsigma\ \acute{\alpha}\mu\phi\iota\sigma\tau\eta\tau\omicron\nu\ \cdot\ \acute{\alpha}\rho\prime\ \sigma\upsilon\kappa\ \acute{\epsilon}\gamma\iota\sigma\tau\iota\kappa\acute{\omega}\nu\ \alpha\upsilon\ \acute{\delta}\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota\nu\ \epsilon\iota\theta\iota\sigma\mu\epsilon\theta\alpha.$ (後の箇所は $\tau\omega\upsilon\tau\omega\ \text{Kühner and Gerth 1898, 654 を参照})$ また (P6) と同じ引用した『国家』 476a5-8 に $\tau\omega\upsilon\tau\omega\ \delta\epsilon\ \tau\acute{\omega}\ \delta\acute{\epsilon}\ \gamma\epsilon\ \acute{\epsilon}\nu\tau\epsilon\gamma\gamma\omicron\nu\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\gamma\iota\ \delta\iota\kappa\alpha\iota\acute{\omega}\nu\ \alpha\upsilon\tau\acute{\omega}\nu\ \kappa\alpha\iota\ \delta\acute{\omega}\kappa\iota\omega\nu\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\gamma\iota\ \tau\acute{\omega}\nu\ \delta\acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu\ \delta\acute{\omega}\lambda\alpha\varsigma\ \acute{\alpha}\mu\phi\iota\sigma\tau\eta\tau\omicron\nu\ \cdot\ \acute{\alpha}\rho\prime\ \sigma\upsilon\kappa\ \acute{\epsilon}\gamma\iota\sigma\tau\iota\kappa\acute{\omega}\nu\ \alpha\upsilon\ \acute{\delta}\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota\nu\ \epsilon\iota\theta\iota\sigma\mu\epsilon\theta\alpha.$ (後の箇所は $\tau\omega\upsilon\tau\omega\ \text{Kühner and Gerth 1898, 654 を参照})$ また (P6) と同じ引用した『国家』 476a5-8 に $\tau\omega\upsilon\tau\omega\ \delta\epsilon\ \tau\acute{\omega}\ \delta\acute{\epsilon}\ \gamma\epsilon\ \acute{\epsilon}\nu\tau\epsilon\gamma\gamma\omicron\nu\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\gamma\iota\ \delta\iota\kappa\alpha\iota\acute{\omega}\nu\ \alpha\upsilon\tau\acute{\omega}\nu\ \kappa\alpha\iota\ \delta\acute{\omega}\kappa\iota\omega\nu\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\gamma\iota\ \tau\acute{\omega}\nu\ \delta\acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu\ \delta\acute{\omega}\lambda\alpha\varsigma\ \acute{\alpha}\mu\phi\iota\sigma\tau\eta\tau\omicron\nu\ \cdot\ \acute{\alpha}\rho\prime\ \sigma\upsilon\kappa\ \acute{\epsilon}\gamma\iota\sigma\tau\iota\kappa\acute{\omega}\nu\ \alpha\upsilon\ \acute{\delta}\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota\nu\ \epsilon\iota\theta\iota\sigma\mu\epsilon\theta\alpha.$ (後の箇所は $\tau\omega\upsilon\tau\omega\ \text{Kühner and Gerth 1898, 654 を参照})$ また (P6) と同じ引用した『国家』 476a5-8 に $\tau\omega\upsilon\tau\omega\ \delta\epsilon\ \tau\acute{\omega}\ \delta\acute{\epsilon}\ \gamma\epsilon\ \acute{\epsilon}\nu\tau\epsilon\gamma\gamma\omicron\nu\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\gamma\iota\ \delta\iota\kappa\alpha\iota\acute{\omega}\nu\ \alpha\upsilon\tau\acute{\omega}\nu\ \kappa\alpha\iota\ \delta\acute{\omega}\kappa\iota\omega\nu\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\gamma\iota\ \tau\acute{\omega}\nu\ \delta\acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron\nu\ \delta\acute{\omega}\lambda\alpha\varsigma\ \acute{\alpha}\mu\phi\iota\sigma\tau\eta\tau\omicron\nu\ \cdot\ \acute{\alpha}\rho\prime\ \sigma\upsilon\kappa\ \acute{\epsilon}\gamma\iota\sigma\tau\iota\kappa\acute{\omega}\nu\ \alpha\upsilon\ \acute{\delta}\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota\nu\ \epsilon\iota\theta\iota\sigma\mu\epsilon\theta\alpha.$ (後の箇所は $\tau\omega\upsilon\tau\omega\ \text{Kühner and Gerth 1898, 654 を参照})$

(44) Cf. Cornford (1939, 75), Fujisawa (1974, 35 n.15) = 藤澤 (2000 [1974], 148 n.16).

(45) なお、Cornford (1939) はこれ以外にも (ii) 「諸事物における感覚知覚される等しさ」を読み込む根拠として 74d4-5 ($\tau\epsilon\gamma\iota\ \tau\acute{\alpha}\ \acute{\epsilon}\nu\ \tau\acute{\omega}\ \iota\varsigma\ \acute{\epsilon}\upsilon\lambda\omicron\upsilon\varsigma\ \tau\epsilon\ \kappa\alpha\iota\ \sigma\iota\varsigma\ \nu\upsilon\nu\acute{\eta}\ \acute{\epsilon}\lambda\acute{\epsilon}\gamma\omicron\mu\epsilon\nu\ \tau\acute{\omega}\ \iota\varsigma\ \iota\sigma\tau\iota\varsigma$ を参照) 中 (p.75) $\tau\acute{\omega}\ \delta\epsilon\ \tau\omega\upsilon\tau\omega\ \tau\acute{\alpha}\ \acute{\epsilon}\nu\ \tau\acute{\omega}\ \iota\varsigma\ \acute{\epsilon}\upsilon\lambda\omicron\upsilon\varsigma\ \iota\sigma\alpha$ (材木に等しい

(45) このパラフレーズしている。このパラフレーズは Fujisawa (1974, 52 n.56) = 藤澤 (2000 [1974], 154 n.55) も採用している。しかし 74d4-5 に *ισα* は書かれておらず、また直前で「等しき」は言及されないの、そのようにパラフレーズするのは無理であろう。この *ισα* は「事態」くらいの意味であり、この箇所全体では「材木や我々が今のべたところの等しいものにおける事態に関して」と理解すべきである (cf. e.g. Rowe 1983, 171)。

(46) 実のところ、一部の学者が想起説に (ii) 「諸事物における感覚知覚される等しき」を読み込もうとする背景には、そう読み込まないと比較が成立しないという思考がある (cf. Crombie 1963, 274-275, Fujisawa 1974, 52 n.56 = 藤澤 2000 [1974], 154 n.55, Scott 1995, 58 n.5)。つまり、(i) 「等しきもの」と (iii) 「等しい材木や石」というカテゴリーの異なるものを比較するのはナンセンスなので、確かにプラトンは (i) と (iii) を比較するかのように書いているが、たんに精確な書き方をしていないだけで、実際には (i) と (ii) を比較していると考えるのである。しかし比較は必ずしも、同一カテゴリーに属する二つ以上のものが並べられてから、それら相互の間に成立するわけではない。場合によっては、或る単純な判断がそのうちにすでに比較を含んでいると見ることもできる。例えば或る考えを「合理的だ」と判断したり、或る風景を「牧歌的だ」と判断したりする場合に、その判断にはすでに「合理性」や「牧歌」との比較が含まれている。このような例と同様に、或る材木や石を「等しい」と判断する場合にはすでにそこに「等しき」との比較が含まれると考えればよいのである。(ii) と (iii) との区別はプラトン哲学にとって非常に重要であり、「不精確な書き方をしている」と言って、テキストの根拠も無しに同化してよいようなものではない。

(47) 上記での「ロコス」(*τοῦτ' ἀλογικόν* 99e5) の意味は *κατὰ τὴν* 議論を指しているが (cf. Kanayama 2000, 42-51)、私は「感覚知覚の領域」と対比される「思考」(*δύναμις νοητικῆς*) と論理 (*λόγος*) の領域」を指す言葉だと考える。

(48) これは van Eck (1994) が明確に指摘し、Rowe (1996, 227) が van Eck の *κατὰ τὴν* 「実質的で重要な貢献」と認めることである。

(49) 例えば *Phr.* 322a3-324d1 *εἰς* (徳) *αἰ* 「分有する」(*μετέχειν* 323a3, 6, c1) と (徳) *αἰ* 「現在している」(*πραγαγίγνεται* 323c6-7) とが交換可能な表現として使われ、329e2-3 では (徳の諸部分を) 「分取する」(*μεταλαμβάνειν* 329e2) と言われた後、(徳のひと) *αἰ* 「取得する」(*λαμβάνειν* 329e4) と同じ言ひ方がなされる。

(50) Dancy (1991, 10-12; 127 n.42, n.45) を参照。Dancy は *Chrm.* の該当箇所の他に *La.* 193c3 を Fujisawa (1974, 42) = 藤澤 (2000 [1974], 128) の *μετέχειν* の一覽表から漏れ *εἰς* *αἰ* を批判している。私の判断では、Dancy が指摘する *La.* 193c3 と Dancy の指摘

にはなご) *Lu.* 197e2 や *Ph.* 322a3-324d1 の箇所に関しては、離在解釈はテクニカルでない用語法だと言って切り抜けることもできそうだが、*Chrm.* の箇所に関しては無理だと思つるので、後者に焦点を当てる。

(51) だから、「分有」は必ず x と ϕ との関係に使われるという藤澤 (2000, 146 n. 4) の主張には賛成できない。しかし私の提案に従う場合でも、Fujisawa (1974) = 藤澤 (2000) の議論の出発点であり、プラトン形而上学解釈の重要な論点である『パルメニデス』第一部の解釈、すなわちそこでパルメニデスは「もつ」と「分有する」を置き換えることによってパズルをつくりだしているという解釈は、そのまま維持される。

(52) Cf. Bostock (1986, 149-150): "This so-called explanation apparently offers us *no* elucidation or clarification of the concept of being *P*, just because you can say exactly the same of any concept whatever." イタリックは原文。

(53) Taylor (1969, 47-48) が「 x は F 」に主張し、Silverman (2002, 323 n. 27) が賛同する。もちろん Taylor の言葉を引用している。

(54) Burge (1971, 7 n.15) と藤澤 (2000 [1996], 370-372) は、原因仮説は「 x は F 」だから、 x は F なのだ」と変わらないと主張する Taylor (1969, 47-48) の解釈を批判している。このとき二人は離在解釈の立場、すなわち (D1) 「 x は F である」と (D2) 「 x は F さを「もつ」とを同化して、(D3*) 「 x は F さのイデアを分有する」から区別する立場をとるので、Taylor の批判は (D3*) と (D2) とを混同することに起因し、その混同さえなければ Taylor のような批判は生じないと考える。Taylor の真意は分らないが、私にはむしろ彼は Bostock (1986, 149-150) の線での批判を大袈裟に表明しただけではないかと思われる。Bostock の批判は、(D1) と (D2) と (D3) をすべて区別する場合にも、それだけでは解決できない問題である。

(55) Vlastos (1981 [1969], 94-95) がこの問題を指摘している。

(56) 藤澤 (2000 [1996], 370-372) は、この Vlastos (1981 [1969], 94-95) の指摘を「すべてに F である」とを知っているとはじめて ϕ に言及しうる」という主張だと理解して、プラトンの考える事態は逆だと批判する。つまり、想起説 (73c1-77a5) で示されるように、我々が「 x は F である」と判断するとき、すでにイデア ϕ が規範としてはたらいっているものであり、したがって我々はすでに ϕ を潜在的に知っている、というのがプラトンの立場である、と批判するのである。しかしこの批判は Vlastos の指摘に十分に応答できているように見えない。想起説は、確かに我々が「キュロスは勇敢である」と判断するとき、勇敢さを潜在的に知っていることを示す。しかしそれと我々が「キュロスは勇敢である」と正しく判断しているかどうかは別問題である。

(57) これに対して、ここで提示されたような論点から形相原因説が情報皆無だと認めつつも、その意義を別のところに求める学者がいる。また van Eck (1996, 226) は、形相原因説の意義は、『バイドン』の魂の不死論証や『ソピステス』の虚偽存在証明に貢献することにあると述べている。しかしここで提示された論点にきちんと応答しなければ、なぜ形相原因説がそれらの論証に貢献するのかが見えてこないであろう。また Sharma (2009, 164-166) は「情報皆無」ではなく「知的透明性」(intellectual transparency)という言葉を用いて、自然学的原因説明のように或る事象を別の事象に還元して説明するのではないところにその意義があると主張する。しかしこれは実質的にラベルを貼り替えただけであり、懐疑的な学者たちを説得することはできないであろう。

(58) この点は Denyer (2008, 126) が指摘している。

(59) プラトン (のソクラテス) が (PD) に関与していることは、Benson (1996) と Benson (2000, 112-141) によって説得的に論証されている。

(60) Benson (1996) と Benson (2000, 112-141) は、(PD) がどのような *F* であろうと無制限に適用されると考える。しかし例えば誰であれアポカドの定義 (系統図) を知らなければ、その人が食べているものがアポカドだと知りえないというのは不合理であろう。プラトンは「銀」や「鉄」などのはっきりとした感覚知覚像をもつものと、「大きさ」「健康」「正義」などのそれをもたないものとを区別するので、私は後者にのみ (PD) が適用されると考える。この点については早瀬 (2017, 61-63) を参照して欲しい。

(61) ここで説明されるのは基本的に「発展主義解釈」と呼ばれる解釈である。発展主義解釈をめぐる近年の議論については早瀬 (2019) を参照のこと。

(62) 引用されている文献が初出でない場合は、初出の年を角括弧で補足する。

(筆者 はやせ・あつし 京都大学大学院文学研究科准教授／西洋古代哲学史)

The Thesis of Forms as Causes in Plato's *Phaedo*

by

Atsushi HAYASE

Associate Professor
Graduate School of Letters
Kyoto University

This article addresses itself to two central and fundamental interpretative problems concerning the thesis of forms as causes, which consists of the form hypothesis and the participation hypothesis, as put forward by Socrates in *Phaedo* 100b1–e4. The first problem is concerned with the ontological status of forms, or Forms as it is usually written by scholars, and the second with the meaningfulness of this thesis.

First, there has been continuing disagreement among scholars about the ontological status of forms/Forms. Some scholars (separationists) claim that Forms are purely separate from perceptible things, as evidenced by e.g. *Symposium* 211a1–b3. Others (immanentists) claim that Forms can somehow be immanent in perceptible things, as evidenced by e.g. *Phaedo* 100d4–7 and *Republic* 476a5–8. The immanentists regard largeness in Simmias mentioned in 102b5–6 as a Form, while the separationists regard it as an immanent character or Form-copy, which is perceptible.

My diagnosis of this interpretative cul-de-sac is that the monolithic understanding of forms is at fault. I propose that Socrates originally conceived of forms as a broad concept which includes two ontologically different kinds of intelligible entities, i.e. those existing *by themselves* (or the true beings, τὸ ὄντως ὄν) and those existing *in connection with things, actions, and situations* (which are at issue in the so-called definitional dialogues and the method of collection and division). I argue that this interpretation can explain Plato's presentation of the thesis of forms as causes consistently throughout, including evidence brought forward by both the separationists and the immanentists.

As for the second problem, many scholars believe that the participation hypothesis (that any x is F because it participates in F -ness) is tautological or uninformative, and attempts proposed to explain its significance seem to me to

have been unsuccessful. I myself call attention to the fact that it is a philosophically significant decision to assume that, for example, any kind of beautiful thing, be it a person or a mathematical formula, is beautiful on account of one single cause, i.e. the participation in the form of beauty. I also suggest that this assumption should contribute to our judgement about the real world because it enables our search for the definition of F -ness, which is required to judge whether or not something is F in reality, by positing the single form of F -ness.